

# 奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成14年度

2006

奈良市教育委員会

# 奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成14年度

2006

奈良市教育委員会



口絵 風铎

史跡・大安寺旧境内の調査 第100次（本文P70～72）

## はじめに

奈良市は大和盆地の北部に位置し、縄文時代以来の貴重な遺跡が数多く存在しています。特に奈良市の中央市街地には、約1300年前の奈良時代の都である平城京跡といった大規模遺跡が所在するとともに、世界遺産にも登録された東大寺をはじめとする「古都奈良の文化財」の歴史そのものが地下に眠っています。

奈良市教育委員会では、毎年、このように優れた埋蔵文化財を後世に伝えるべく、平城京跡を中心に発掘調査を実施しています。調査によって得られた資料や情報は、当時の人々の暮らしぶりを知る上で大きな手がかりになります。そうした意味においても、貴重な資料を後世に守り伝えていくことは我々の責務であります。

本書は、平成14年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書です。本書が地域の歴史研究に活用され、埋蔵文化財に対する理解を深めていただければ幸いです。

最後に、本書の作成にあたって御指導・御協力をいただいた関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

奈良市教育委員会  
教育長 中尾 勝二

## 例　　言

1. 本書は、平成14年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要をまとめたものである。
2. 平成14年度～平成17年度の調査体制については下記のとおりである。なお、各調査の現場担当者は発掘調査一覧表に示した。

平成14～15年度

社会教育部 文化財課	課長	前原武嗣	主幹 森川倫秀
埋蔵文化財調査センター	所長	高谷明男	
庶務係	係長	杉村武史	事務吏員 山形和広
調査第一係	係長	西崎卓哉	主任 立石堅志
技術吏員		鍾方正樹	安井宣也 松浦五輪美 宮崎正裕 久保清子 大庭淳司
		池田富貴子	
		中島和彦	池田裕英 久保邦江 (~14年度: 調査第一係、15年度: 調査第二係)
調査第二係	係長	篠原豊一	主任 三好美徳
	技術吏員	森下浩行	武田和哉
		秋山成人	原田憲二郎 山前智敬 (~14年度: 調査第二係、15年度: 調査第一係)

平成16～17年度

社会教育部 文化財課	課長	福井 進	主幹 谷村 勝
埋蔵文化財調査センター	所長	高谷明男	(~16年度)、川本恭久 (平成17年度～)
庶務係	係長	北尾秀一	事務吏員 山形和広
調査第一係	係長	立石堅志	
技術吏員		鍾方正樹	秋山成人 安井宣也 松浦五輪美 宮崎正裕 久保清子
		山前智敬	大庭淳司
調査第二係	係長	三好美徳	
	技術吏員	森下浩行	武田和哉 中島和彦 久保邦江 池田裕英 原田香織
	再任用職員	森川倫秀	

3. 発掘調査と本書の作成については、奈良文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会等関係諸機関からご指導とご教示を賜った。また、土地所有者等からの多大な協力をいただいた。記して感謝いたします。
4. 各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数である。

遺跡の略号は以下のとおりである。

HJ - 平城京跡 DA - 大寺古墳境内 TI - 平城京東市跡推定地 GG - 元興寺跡境内 NR - 奈良町遺跡 MM - 水間遺跡

5. 本書で使用した遺構等の番号は、一部を除いて調査ごとに付した仮番号である。遺構の番号の前には、SA (壁・柱列)、SB (掘立柱建物)、SD (素掘り溝)、SE (井戸)、SF (道路)、SK (土坑)、SX (その他) の記号を付した。また、遺構の大きさの表記は、すべて遺構検出面での計測値である。

6. 本書で使用した奈良時代の遺物名称・形式・型式は、一部を除いて、以下の刊行物に準拠した。

軒瓦：『平城京藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会、1966

鬼瓦：毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦－8世紀を中心として」『研究論集IV』奈良国立文化財研究所、1980  
上器：『平城宮発掘調査報告書XII』奈良国立文化財研究所、1982

7. 引用文献のうち、奈良市教育委員会、奈良県教育委員会、奈良（国立）文化財研究所発行の概報・年報については、調査機関名（それぞれ市、県、国と表示）、調査記号と報告年度のみを本文中に記した。

8. 発掘調査位置図については、奈良市発行の1/2,500大和都市計画図を、調査地位置図については、国土地理院発行の1/25,000地形図を使用した。

9. 本文中、図中に示した位置の表示は、法改正（2002年4月）前の平面直角座標系VIによる。

10. 古墳時代以前の遺跡については、仮に大字名を付して遺跡名としたものもある。

11. 本書の作成は、埋蔵文化財調査センター職員と文化財課記念物係職員が分担して行い、文末に文責を示した。

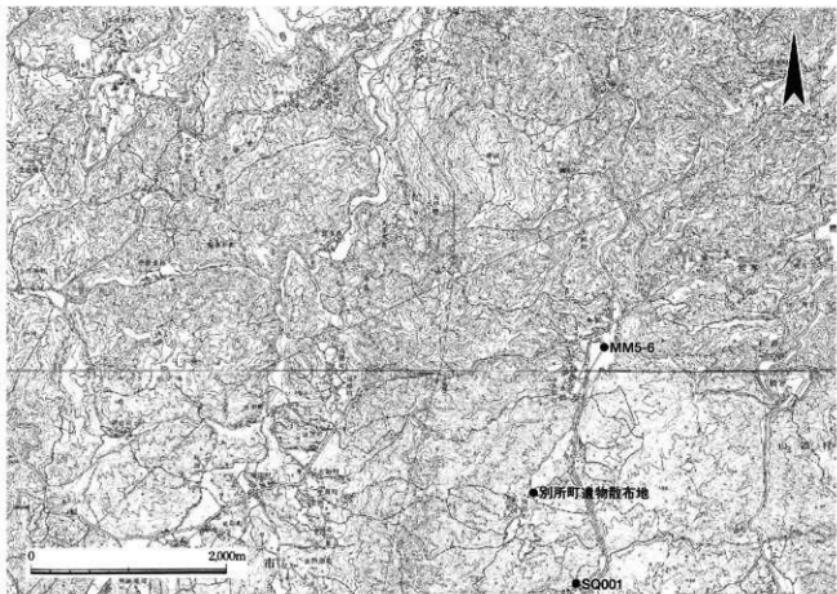
12. 本書の編集は、三好美徳、立石堅志が担当した。

## 本 書 目 次

1. JR奈良駅周辺地区画整理事業に係る発掘調査	.....	1
(1) 三条遺跡・平城京左京四条五坊六坪の調査	第477-1 - 3 - 4 - 5 - 6次	
(2) 平城京左京四条五坊七坪の調査	第477-2次	
(3) 平城京左京四条五坊八坪の調査	第477-7次	
(4) 平城京左京四条四坊十六坪の調査	第477-8次	
2. JR奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査 平城京左京五条四坊の調査	.....	17
	第486次	
3. 近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に係る発掘調査	.....	21
(1) 平城京右京二条三坊十二坪の調査	第480-1次	
(2) 平城京右京二条三坊一坪・一条南大路の調査	第480-2次	
(3) 西大寺旧境内の調査	第14-1 - 2次	
4. 平城京左京四条五坊十二坪の調査 第476次	.....	30
5. 平城京左京五条五坊十一坪の調査 第478次	.....	32
6. 平城京左京五条四坊十一坪の調査 第481次	.....	35
7. 平城京左京四条六坊十五坪・奈良町遺跡の調査 第482次	.....	37
8. 平城京右京四条四坊一坪の調査 第483次	.....	41
9. 平城京左京八条二坊五坪の調査 第484次	.....	42
10. 平城京右京一条二坊・一条南大路の調査 第485次	.....	46
11. 平城京左京二条大路の調査 第487次	.....	48
12. 平城京右京四条・西二坊大路の調査 第488次	.....	50
13. 平城京右京六条三坊六坪・六条野々宮古墳の調査 第489次	.....	51
14. 平城京東市跡推定地の調査 第30次～第32次	.....	54
15. 史跡大安寺旧境内の調査 第96次～第100次	.....	65
16. 元興寺旧境内の調査 第56次～第58次	.....	73



平成14年度 発掘調査位置図A 1/50,000



平成14年度 発掘調査位置図B 1/50,000

## 平成14年度 発掘調査一覧表

番号	調査次数	調査地名	調査地	調査期間	面積 面積	担当者	調査基準/事業内容	事業区分	届出番号
1	H J 476	平城京左京西条五坊十坪	杉ヶ町 47 - 2	H 14.5.9 ~ 5.24	765 m <sup>2</sup>	三好	奈良会社真釋海跡、洪代住宅新築	奈良市	H 13.3065
2	H J 477-1	平城京左京西条五坊六坪	三条木町 323 - 7 塚	H 14.5.13 ~ 6.19	353 m <sup>2</sup>	原田重	奈良市長・J R会社真釋海跡地区土地整理整備事業実施	公共	S 63.3065
3	H J 477-2	平城京左京西条五坊七坪	三条木町 323 - 1 塚	H 14.6.19 ~ 7.9	67 m <sup>2</sup>	栗田重	奈良市長・J R会社真釋海跡地区土地整理整備事業実施	公共	S 63.3065
4	H J 477-3・4	平城京左京西条五坊八坪	三条木町 325 - 1, 325 - 3 塚	H 14.6.17 ~ 10.9	1,860 m <sup>2</sup>	安井・池山裕	奈良市長・J R会社真釋海跡地区土地整理整備實行会事業	公共	S 63.3065
5	H J 477-5・6	平城京左京西条五坊九坪	三条木町 325 - 1, 325 - 1 塚	H 14.9.17 ~ 12.25	1,700 m <sup>2</sup>	安井・池山裕	奈良市長・J R会社真釋海跡地区土地整理整備實行会事業	公共	S 63.3065
6	H J 477-7	平城京左京西条五坊八坪	三条木町 2 - 1 - 1 塚	H 14.7.29 ~ 8.20	160 m <sup>2</sup>	原田重	奈良市長・J R会社真釋海跡地区土地整理整備實行会事業	公共	S 63.3065
7	H J 477-8	平城京左京西条五坊十六坪	三条木町 11 - 1 塚	H 15.1.7 ~ 2.6	170 m <sup>2</sup>	原田重	奈良市長・J R会社真釋海跡地区土地整理整備實行会事業	公共	S 63.3065
8	H J 478	平城京左京五条五坊一坪	佐木辻町 83 - 4	H 14.5.30 ~ 8.13	650 m <sup>2</sup>	山崎	中村産業株式会社／台原建設	奈良市	H 14.3334
9	H J 479	平城京東西北坊大路	大宮町 2 号日 81 - 1 塚	H 14.6.3 ~ 7.19	394 m <sup>2</sup>	久保浩	奈良市長・荒芝大蔵御街道路整備事業	公共	H 10.3061
10	H J 480-1	平城京右京二条云坊十坪	菅原町 247 - 1	H 14.6.3 ~ 8.1	650 m <sup>2</sup>	松浦・宮崎 誠	奈良市長・西人少前町荒原土地 区域整理保護事業	公共	S 63.3066
11	H J 480-2	平城京右京二条三坊一坪・一条坊大路	西大寺町 2390 - 5 塚	H 14.12.20 ~ 12.25	45 m <sup>2</sup>	宮崎・池田富	奈良市長・西人少前町荒原土地 区域整理保護事業	公共	S 63.3066
12	H J 481	平城京右京五条四坊十一坪	人安寺六丁目 2 - 11	H 14.7.10 ~ 7.24	105 m <sup>2</sup>	武田	個人／向住住宅建設	奈良市	H 16.3000
13	H J 482	平城京左京西条六坊十五坪・奈良町通	井町 25	H 14.6.9 ~ 9.27	204 m <sup>2</sup>	中央	奈良市長／椿井小学校校舎建設 事業	公共	H 14.3088
14	H J 483	平城京右京西条四坊一坪	宝来四丁目 15 - 18	H 14.9.24 ~ 10.8	196 m <sup>2</sup>	武田	個人／共同住宅建設	奈良市	H 13.3033
15	H J 484	平城京左京八条一坊五坪	吉町 62 他	H 14.10.21 ~ 11.25	318 m <sup>2</sup>	武田	個人／共同住宅建設	奈良市	H 14.3136
16	H J 485	平城京右京一条一坊・一条町大路	西大寺園町 1 丁目 2182 - 3	H 14.11.11 ~ 12.20	245 m <sup>2</sup>	山崎	奈良市長不動産公社／ マンション建設	奈良市	H 14.3145
17	H J 486	平城京左京五条四坊十六坪・東御坊大路	大森町 122 - 1 塚	H 14.11.20 ~ H 15. 314	1,120 m <sup>2</sup>	吉石・近藤 信	奈良市長・J R会社真釋海跡特定 地区内土地整理整備事業	公共	H 12.3145
18	H J 487	平城京左京二条大路・奈良町通	芝町 75 - 3 塚	H 14.11.28 ~ 12.9	50 m <sup>2</sup>	久保浩	奈良市長・二条御坊特定道路 整備事業	公共	H 16.3155
19	H J 488	平城京右京四条・西二坊大路	五一丁目 516	H 14.12.2 ~ 12.9	37 m <sup>2</sup>	中央	奈良市長・市道中郷部 613 号線 道路改修工事	公共	H 16.3189
20	H J 489	平城京右京六条三坊六坪・六条町今宮	六条一丁目 491 - 1 塚	H 14.12.9 ~ H 15. 111	180 m <sup>2</sup>	三好	個人／個人住宅新築	奈良市	H 14.3005
21	T I 30	平城京東市御宿定期	末永町 433 - 1 塚	H 14.11.5 ~ 11.11	142 m <sup>2</sup>	中央	個人／共同住宅の新築	奈良市	H 12.3223
22	T I 31	平城京東市御宿定期	東久木町 433 - 6 塚	H 15.1.10 ~ 3.1	340 m <sup>2</sup>	中島・久保浩	奈良市長・西丸光佐御宿定期特定 地区内道路整備事業	公共	H 14.3096
23	T I 32	平城京東市御宿定期	吉町 590	H 15.1.14 ~ 2.24	300 m <sup>2</sup>	三好	奈良市長・重要道路兩側面整備 事業	奈良市	H 16.3189
24	D A 96	史跡大安寺旧境内	大安寺五丁目 991, 992	H 14.4.15 ~ 4.19	14 m <sup>2</sup>	山崎	個人／個人住宅改善	奈良市	H 12.1056
25	D A 97	史跡大安寺旧境内	大安寺四丁目 1058 - 1	H 14.5.18 ~ 6.27	40 m <sup>2</sup>	武田	天理歴史と文化教會／原種埋葬	奈良市	H 14.1001
26	D A 98	史跡大安寺旧境内	大安寺二丁目 1317	H 14.10.22 ~ 10.29	9 m <sup>2</sup>	山崎	個人／個人住宅改善	奈良市	H 14.1026
27	D A 99	史跡大安寺旧境内	大安寺五丁目 967, 15	H 14.12.3 ~ 12.6	7 m <sup>2</sup>	三好	個人／個人住宅新築	奈良市	H 14.1051
28	D A 100	史跡大安寺旧境内（跡跡）	東九条町 1320 - 2 塚	H 14.11.18 ~ H 15.33	270 m <sup>2</sup>	松浦	奈良市長・史跡大安寺旧境内 保存整備	奈良市	H 14.1037
29	G G 56	元興寺境内、奈良町通	今禪門町 10-2 他	H 14.5.22 ~ 5.31	77 m <sup>2</sup>	武田	ロイヤルエース株式会社／ 奈良住宅建設	奈良市	H 12.3344
30	G C 57	萬葉古墳、元興寺境内、奈良町通	鶴ヶ町 7 - 2	H 14.6.27 ~ 7.8	9 m <sup>2</sup>	三好	個人／個人住宅新築	奈良市	H 14.3009
31	G G 58	元興寺旧境内	中南町 9 - 1	H 15.1.7 ~ 1.14	22 m <sup>2</sup>	山崎	個人／個人住宅新築	奈良市	H 14.3227
32	S D 14 - 1	西大寺旧境内	西大寺町 2413	H 11.9.2 ~ 12.3	1,000 m <sup>2</sup>	松浦・宮崎 誠	奈良市長・西大寺町西大寺土地 区域整理保護事業	公共	S 63.3096
33	S D 14 - 2	西大寺旧境内	西大寺町 2364 他	H 14.12.9 ~ 12.26	87 m <sup>2</sup>	宮崎・池山裕	奈良市長・西人少前町荒原土地 区域整理保護事業	公共	S 63.3096
34	MM 006	水原道路	水原町 528 他	H 14.5.13 ~ 6.12	600 m <sup>2</sup>	松方・大庭	奈良県知事・高見はる路整備事業	奈良市	H 12.3159
35	MM 006	水原道路	水原町 528 他	H 14.6.26 ~ 10.11	2,400 m <sup>2</sup>	松方・大庭	奈良県知事・高見はる路整備事業	奈良市	H 12.3153
36	S Q 001	袖ノ川月ノヲ遺跡	袖ノ川町 695 他	H 14.10.17 ~ 11.20	150 m <sup>2</sup>	松方・大庭	奈良県知事・高見はる路整備事業	奈良市	H 12.3155
37	-	廻所付建物新築	別荘町 441 他	H 14.12.2 ~ H 15.1. 9	400 m <sup>2</sup>	松方・大庭	奈良県知事・高見はる路整備事業	奈良市	H 12.3163

## 1. 三条遺跡・平城京左京四条四・五坊の調査 JR奈良駅周辺地区画整理事業に係る発掘調査

この調査は、奈良市がJR奈良駅周辺で進めている土地区画整理事業に係り実施したものである。

市教育委員会では、事業地内の発掘調査を昭和63年度から継続的に実施しており、これまでに駅西側は、調査をほぼ終了している。駅東側も今後数年で調査を完了する予定である。

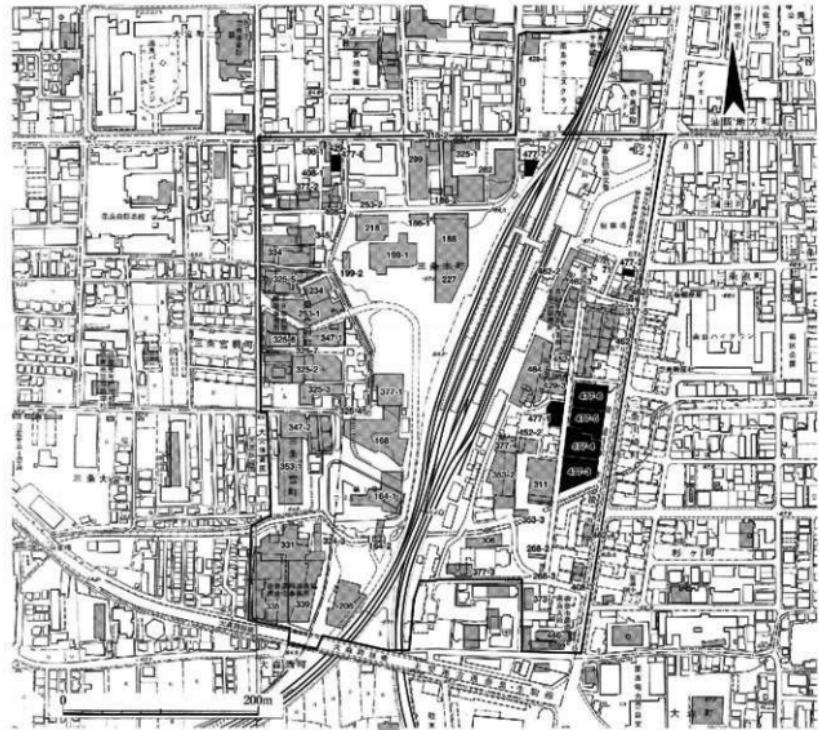
平成14年度は、貸付金事業として、駅の東側において

6箇所、駅の西側において2箇所、合計4,410m<sup>2</sup>の調査を実施した。その結果、初年度からの総調査面積は50,443m<sup>2</sup>となった。

調査地は、平城京の条坊復原では、左京四条四坊十六坪及び四条五坊六・七・八坪にある。ここでは、坪ごとにまとめて報告する。なお、本文中の遺構番号は、事業地内で坪ごとに付している通し番号である。

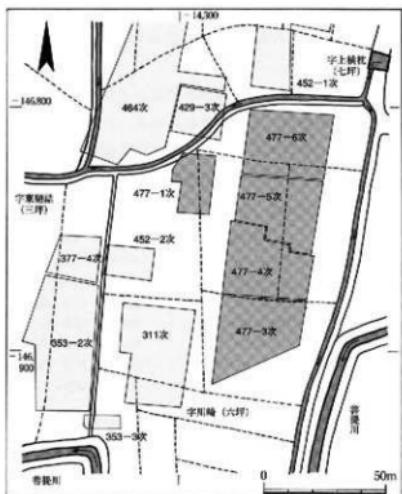
平成14年度 JR奈良駅周辺地区画整理事業地内発掘調査一覧表

遺跡名	調査次数	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
三条遺跡・平城京跡（左京四条五坊六坪）	HJ477-1	貸付金事業	三条木町 273 - 7 他	H14. 5.13 ~ 6.19	333 m <sup>2</sup>	原田g
平城京跡（左京四条五坊七坪）	HJ477-2	貸付金事業	三条木町 323 - 1 他	H14. 6.19 ~ 7. 9	67 m <sup>2</sup>	原田g
平城京跡（左京四条五坊六坪）	HJ477-3	貸付金事業	三条木町 326 - 1 他	H14. 8. 2 ~ 10. 9	980 m <sup>2</sup>	安井・池田g
平城京跡（左京四条五坊六坪）	HJ477-4	貸付金事業	三条木町 323 - 3 他	H14. 6.17 ~ 8. 1	900 m <sup>2</sup>	安井・池田g
平城京跡（左京四条五坊六坪）	HJ477-5	貸付金事業	三条木町 323 - 1 他	H14.11.13 ~ 12.25	650 m <sup>2</sup>	安井・池田g
平城京跡（左京四条五坊六坪）	HJ477-6	貸付金事業	三条木町 322 - 1 他	H14. 9.17 ~ 11.11	1,050 m <sup>2</sup>	安井・池田g
平城京跡（左京四条五坊八坪）	HJ477-7	貸付金事業	三条木町 2 - 1 - 1 他	(試掘: H 14. 7.17)	80 m <sup>2</sup>	原田g
平城京跡（左京四条四坊十六坪）	HJ477-8	貸付金事業	三条宮前町 11 - 1 他	H14. 7.29 ~ 8.20 H15. 1. 7 ~ 2. 6	160 m <sup>2</sup> 170 m <sup>2</sup>	池田g



JR奈良駅周辺地区画整理事業地内調査 発掘区位図 1/5,000

# (1) 三条遺跡・平城京左京四条五坊六坪の調査 第477-1・477-3~6次



調査地周辺の明治時代初期の水田地図（地籍図による）1/2,000

## I はじめに

調査地は、笠置山地西麓に形成された能登川扇状地の扇端部に位置する。平城京の条坊復原では左京四条五坊六坪の西半部で、北端は四条条間路にあたる。

現状は、第477-1次調査地が宅地、第477-3~-6次調査地がバス操車場及び駐車場で、旧状は上図に示すような地割の水田である。

六坪内では、今回の調査地の西隣接地において過去に5回の調査が行われている。市第268-1次調査（平成5年度）・第311次調査（平成6年度）では、古墳時代の溝、埋土中に奈良時代から中世の遺物を含む南北に長い池状遺構と中・近世の耕作溝・土坑を確認した。池状遺構は三・六坪境小路の東側溝が想定される位置に掘



第477-1次調査 発掘区北壁（東半）土層（南から）

削されている。市第353-3次調査（平成8年度）では、古墳～奈良時代の遺物を含む流路と時期不明の南北溝を確認した。また、市第452-2次調査（平成12年度）では、前述の市第268-1・311次調査で確認した池状遺構と一連のものとみられる南北溝と、埋土中に奈良・平安時代の遺物を含む河川を確認している。

今回の調査は、六坪内の様相の確認を主な目的として実施した。また、その前後の時代における土地利用の様相の確認にも留意した。

## II 調査の概要

### A. 層序

六坪の北西辺にあたる第477-1次発掘区と西半東寄りにあたる第477-3~-6次発掘区では様相が異なる。

第477-1次発掘区 基本的に厚さ0.2mの盛土以下、水田耕土の灰褐色土層（厚さ0.1m）、水田床土の茶灰色砂質土層（厚さ0.1m）、弥生時代後期の土器を含む湿地の堆積層である暗褐色土層（厚さ0.2m）と続き、現地表下約0.6mで扇状地堆積層である明黃灰色土あるいは黄褐色砂質土の地山となる。地山上面は弥生時代後期の遺構の存する面である。その標高は概ね65.0~65.5mで、東から西に向かって緩やかに下る。

なお発掘区南西隅では、暗褐色土の上に湿地の堆積層である灰色粘砂層がみられる。この層からは奈良時代の土師器壺が出土した。

第477-3~6次発掘区 基本的に厚さ約1mの盛土以下、水田耕土の黒灰色砂質シルト層（厚さ0.2m）、水田床土の灰色砂質シルト層（厚さ0.1m）があり、現地表下約1.3mで灰色砂混シルトを主とした地山となる。地山上面が弥生時代から近世にかけての遺構の存する面である。その標高は概ね65.2~65.7mで、北から南に向かって緩やかに下る。

なお、第477-3次発掘区南辺では水田床土の灰色砂



第477-6次調査 発掘区東壁（南半）土層（西から）

質シルト層が3~5層あり、東寄りではさらにその下に旧河川の氾濫で堆積した砂礫層を挟んで地山に至る。この砂礫層には江戸時代の遺物を含む。

## B. 検出遺構

各発掘区とも地山上面で遺構検出を行い、弥生時代以前及び奈良・平安時代の旧河川と、弥生時代と江戸時代の遺構を確認した。概要是以下の通りである。

### (1) 弥生時代以前

**河川06** 第477-4・5次発掘区で確認した東から西に流れる旧河川で、幅約6m、深さ0.6~1.4m。埋土は上位が灰色のシルトや砂で、下位が砂礫である。

上位の埋土の上面では幅約3m、深さ約0.4mの蛇行する小路を確認した。埋土は東寄りが砂で西に向かってシルトに変化する。埋土から縄文時代晩期と弥生時代後期の土器片が出土した。

**S D 07~10** いずれも第477-1次発掘区で確認した溝である。S D 07は幅0.7~1.2m、深さ0.4mの溝で、発掘区外北へ続く。埋土は上から淡灰褐色土、淡灰色砂質土。S D 08は幅0.7~1.5m、深さ0.3mの溝で、発掘区外南へ続く。埋土は上から暗褐色土、暗灰褐色土。S D 09はS D 08の西側で検出した幅0.8m、深さ0.05mの溝で、埋土は灰褐色土。S D 10はS D 08の東側で検出した幅0.4m、深さ0.1mの溝で、埋土は暗褐色土。各溝の埋土から弥生時代後期の土器片が出土した。

**S K 11** 第477-1次発掘区で検出した長径2.1m、短径0.6mの平面稍円形の土坑で、深さは0.3m。埋土は黄灰色土で、弥生時代後期の土器片が出土した。

**S X 12** 第477-1次発掘区で検出した土器埋納遺構である。掘形は径0.5mの平面円形。上部は削平されているが、本来の深さは土器の出土状態から0.3m程度と

推察する。坑内には頭部以上を打ち欠いた短頸壺を据え、高杯の杯部を利用した蓋をする。ともに弥生時代後期の土器である。短頸壺内部に遺物はなかった。土器棺墓の可能性を考える。

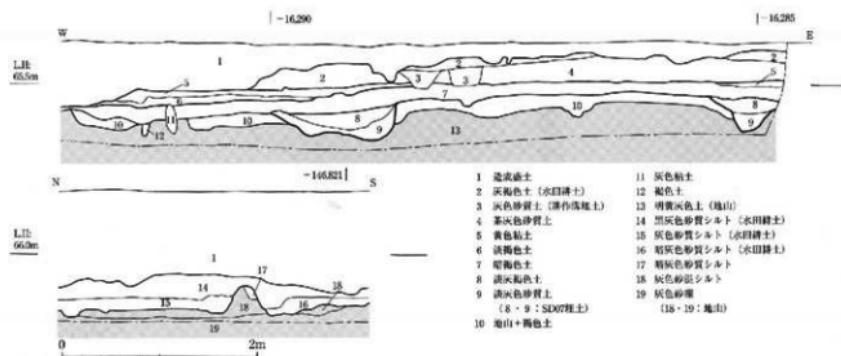
### (2) 奈良・平安時代

**河川05** 第477-3次発掘区で確認した幅約13m、深さ約1.8mの旧河川で、南東から北西へ流れる。埋土は、底面から1.5m上までが水成の堆積層で、その上が鎌倉時代以降の埋立て土である灰色砂質シルト層（図中14層）となる。水成の堆積層は、シルトや砂を主とする上層（図中15~21層）と砾を主とする下層（図中22~24層）に大別できる。上層では奈良・平安時代の土器・土製品、瓦片が、下層では奈良時代の土器片がそれぞれ出土した。西に隣接する市第452-2次調査地（平成12年度）で確認した河川05とは、埋土や出土遺物が同様であることから一連のものと判断する。

### (3) 江戸時代

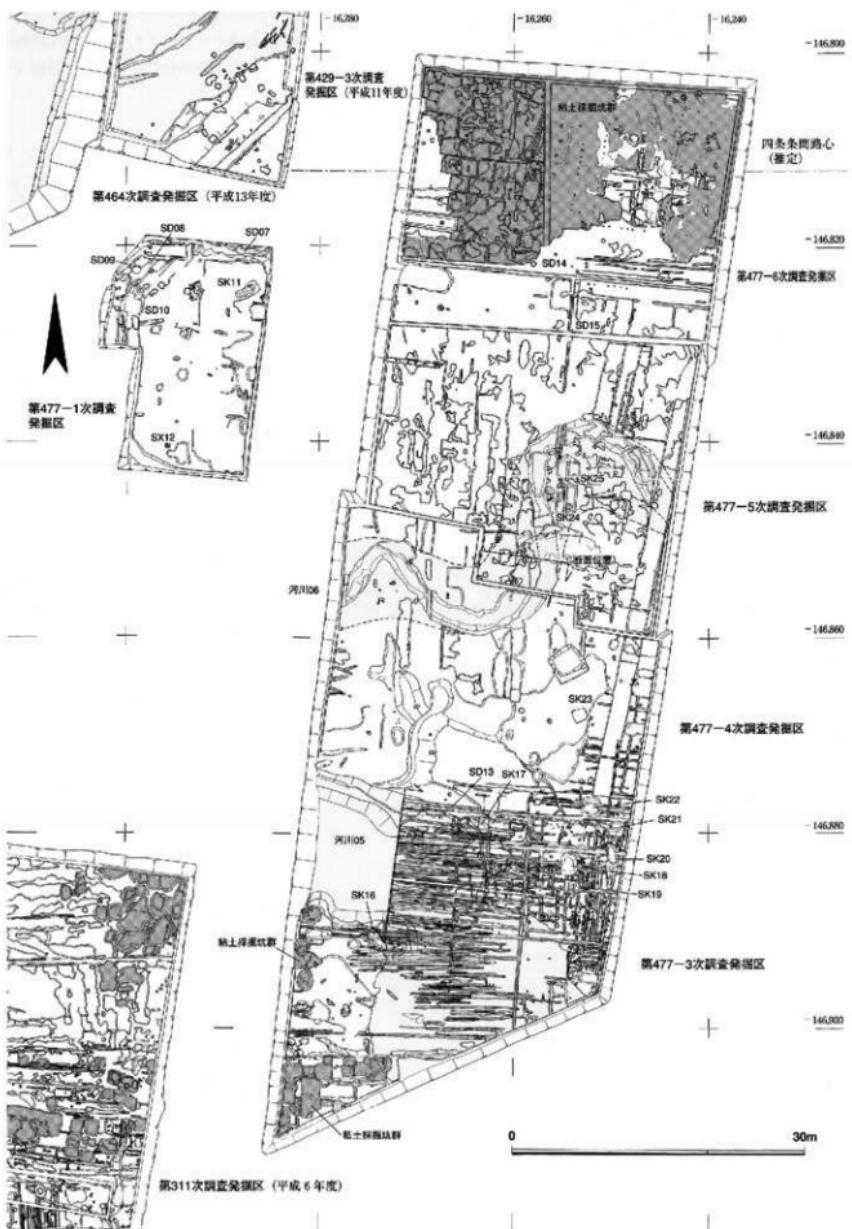
**S D 13~15** いずれも幅0.5m、深さ0.1mの溝で、位置は前掲の図で示した明治時代初期の畦畔と一致する。埋土は灰色砂質シルト。S D 13は第477-3次発掘区で検出した東西方向の溝で、方向は方眼方位西に対しやや北に振れる。溝底中央に杭列が1条打たれている。S D 14は第477-6次発掘区で東西方向の溝で、方向はS D 13と同様に方眼方位西に対しやや北に振れる。S D 15は第477-5・6次発掘区で検出した南北方向の溝で、方眼方位北に対しや東に振れる。S D 13・14の埋土から17世紀以降の土器片が出土した。

**S K 16~25** いずれも長辺1.5~2m、短辺1~1.5mの平面長方形の土坑で、深さ約0.5m。埋土は灰色砂質シルト。S K 21の埋土から18世紀の土器片が出土した。



第477-1次調査 発掘区北壁断面図 1/50 (上)

第477-6次調査 発掘区東壁断面図 1/50 (下)





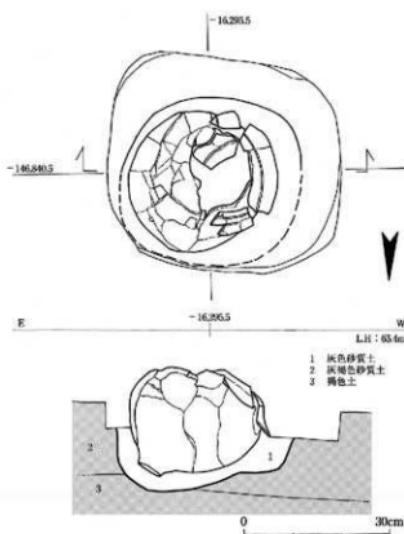
第477-1次調査 発掘区全景（北西から）



第477-1次調査 土器埋納造構SX12（北から）



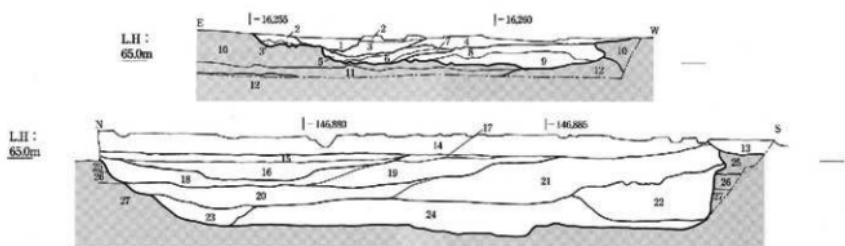
第477-1次調査 河川05（南東から）



第477-1次調査 土器埋納造構SX12 平面・立面図 1/10



第477-1次調査 河川05断面（西から）



- 1. 灰色粗質土
- 2. 灰色粗質土・中粒砂
- 3. 灰色シルト・中粒砂互層
- 4. 灰色粗質シルト
- 5. 灰色粗質シルト  
(10-12: 通山)
- 6. 灰色粗質砂質シルト
- 7. 灰色シルト・中粒砂
- 8. 灰色粗質シルト
- 9. 灰色粗質砂質シルト
- 10. 灰色粗質シルト
- 11. 灰色シルト質中粒砂
- 12. 灰色粗質・小礫混粗質
- 13. 灰色砂質シルト (十坑埋土)
- 14. 灰色砂質シルト (埋め立て土)
- 15. 灰色粗質土

16. 灰色粗質・中粒砂・シルト互層

17. 灰色粗質シルト

18. 灰色粗質砂質・細層

19. 灰色粗・中粒砂互層・細・小礫互層

(斜坡堤防をなし)

20. 灰色粗質砂質・表面層・シルトブロック

21. 灰色粗・地盤接觸・細・小礫互層

+シルトブロック (斜坡堤防をなし)

22. 灰色粗質砂質・細層・シルトブロック

23. 灰色粗・地盤接觸砂質・小礫

24. 灰色 (上) 粗粒砂・(下) 小礫

(15-24: 河川05埋土)

25. 灰色粗質シルト

26. 灰色 (上) 粗粒砂・(下) 細層

27. 灰色粗質シルト・小礫

(25-27: 河川)

第477-5次調査 河川06断面土層図 (上)

第477-3次調査 河川05断面土層図 1/100 (下)



第477-3～6次調査 発掘区全景（上が北）



第477-6次調査 発掘区全景（北西から）



第477-5次調査 発掘区全景（北から）



第477-4次調査 発掘区全景（南東から）



第477-3次調査 発掘区全景（東から）

**耕作溝** 前述の溝 S D13の南側で顯著にみられ、溝の方向が方眼方位西のものと、それよりやや北に振れるものとがあり、後者は前で示した明治時代初期の地割と整合する。いずれも埋土は灰色砂質シルトで、埋土中から主に17世紀以降の土器片が出土した。

**粘土探査坑群** 第477-3次発掘区の西辺・南西辺と、第477-6次発掘区の溝 S D14の北側でみられる。いずれも埋土は灰色砂質シルトで、粘土ブロックを含む。

第477-3次発掘区の西辺では径1.5m程度の平面円形のものが多く、同南西辺では一辺1.5~2mの平面隅丸方形のものが多い。ともに深さは0.5m程度。埋土から16~17世紀の土器片が出土した。

第477-6次発掘区の溝 S D14の北側では、一辺1.5~2mの平面隅丸方形のものと長辺約6m、短辺約3mの平面長方形のものがある。ともに深さは0.5m程度。埋土から12~14世紀と17~18世紀の土器片が出土した。

### Ⅲ 出土遺物

出土遺物は、5箇所の発掘区で合わせて遺物整理箱50箱分ある。大半が土器・土製品で、他に瓦類、木製品、石器(剣片を含む)等がある。以下主なものを記す。

#### A. 土器・土製品

縄文時代から江戸時代にかけてのものがある。

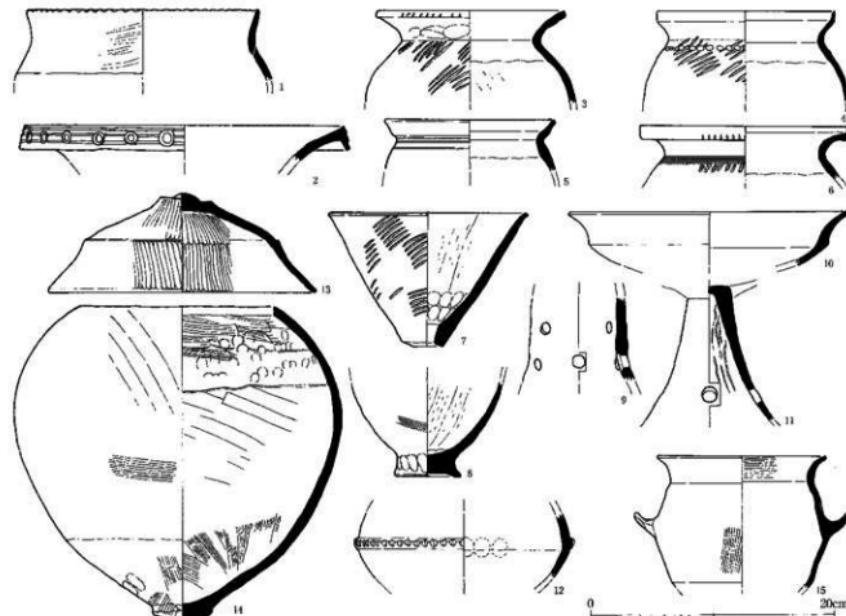
**縄文時代** 弥生時代以前の河川06から出土した晩期中葉の滋賀県IV式の特徴をもつ深鉢片1点(1)がある。

**弥生時代** 後期後半の大和第VI様式の特徴をもつ壺(2・14)及び壺蓋(13)、甕(3~6)、鉢(7~8)、器台(9)、高杯(10~11)、手焙形土器(12)がある。2~5・7~10・12は溝 S D07、6は溝 S D08、11は溝 S D09、13・14は土器埋納遺構 S X12から出土した。

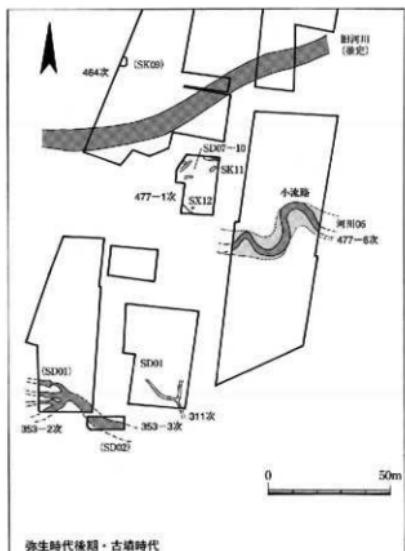
壺のうち、2は広口壺の口縁部で、口縁端部に凹線と円形浮文が施されている。14は本米短頸壺で、口部を打ち欠いている。14とセットとなる13は本来高杯の杯部で、壺蓋に利用されたものである。甕には、体部にタタキ目が残る在地のもの(3・4)の他に、近江系のもの(5・6)がある。鉢には、底部に穿孔が施されたもの(7)とそうでないもの(8)がある。手焙形土器(12)の体部の突帯には刻み目が施されている。

**奈良・平安時代** 第477-1次発掘区南西隅の灰色粘砂層から出土した奈良時代の土師器甕(15)と、河川05から出土した奈良・平安時代の土器・土製品がある。

第477-1次発掘区の灰色粘砂層から出土した奈良時代の土師器甕(15)は、体部に一对の把手が付く。



第477-1 - 3 - 6次調査 出土土器 1/4



弥生時代後期・古墳時代



奈良・平安時代（条坊は推定）

調査地の概観変遷概念図① 1/2,000

河川05から出土した土器・土製品には、日常雑器である上部器や須恵器の杯・皿・壺・甕等と、祭祀に関連する上馬・ミニチュア炊飯具・人面墨書き土器がある。

鎌倉時代以後 粘土採掘坑から出土した12~14世紀の土師器皿・瓦器輪等、耕作溝や粘土採掘坑から出土した16~18世紀の土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢・陶器（信楽焼鉢・唐津碗）、磁器（伊万里焼）等がある。いずれも細片で磨耗している。

## B. 瓦類・木製品

**瓦類** 奈良・平安時代の河川05から出土した奈良時代の軒丸瓦2点（6282型式Ba種、6279型式A種）、江戸時代の土坑・耕作溝・粘土採掘坑から出土した平安時代以降の軒丸瓦（巴紋）、丸瓦、平瓦、土管がある。

**木製品** 奈良・平安時代の河川05から出土した曲物底板や、第477-6次発掘区の江戸時代の粘土採掘坑群から出土した漆椀等がある。

## IVまとめ

事業地内における左京四条五坊六坪にあたる地域の発掘調査は、今回ではほぼ完了した。今までの発掘調査で得られた成果の概要は、以下の通りである。

### 1 過去の地形と河川について

**旧地形** 調査地内の層序は、基本的には水田耕土・床土の下で扇状地堆積層の地山となっていた。地山上面はかなり平坦で、弥生時代以前、奈良・平安時代の旧河川

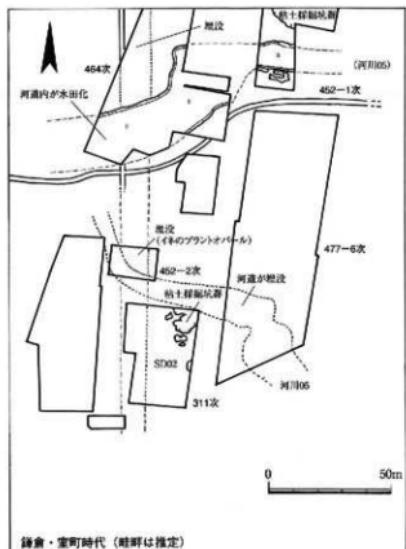
と弥生時代後期から江戸時代にかけての遺構とが重複して遺存していた。

以上のことから、調査地内の旧地形は弥生時代後期には広く安定した微高地となっており、その後奈良時代から江戸時代にかけて開発が繰り返された結果、平坦な地形が成立したという推移が把握できた。

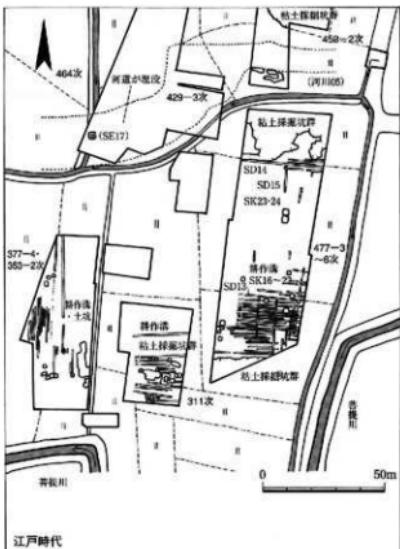
**旧河川** 弥生時代以前の旧河川である河川06と、奈良・平安時代の旧河川である河川05を確認し、調査地付近における平安時代以前の旧河川の様相が現在と全く異なっていることがわかった。

弥生時代以前の旧河川の河川06は、調査地の中央部を東西に流れている。その西延長上にあたる第477-1次発掘区では、弥生時代後期の遺物を含む暗褐色土と、奈良時代の遺物を含む灰色粘砂との2層の湿地の堆積層がみられたことから、この旧河川は弥生時代後期には埋没が進んで水が流れにくくなり、以後奈良時代まで周辺が湿地になっていたことがうかがえた。

奈良・平安時代の旧河川の河川05は、調査地の南半部を南東から北西に流れている。埋土が上から鎌倉時代以降の埋め立て土、奈良・平安時代の遺物を含む砂やシルト、奈良時代の遺物を含む砂礫となっていたことから、この旧河川は奈良時代に形成され、平安時代には埋没が進み、残った凹地が鎌倉時代以降に埋め立てられたことがうかがえた。



鎌倉・室町時代（畦畔は推定）



調査地の景観変遷概念図② 1/2,000

## 2 過去の土地利用について

地山上面で弥生時代後期、奈良時代、鎌倉・室町時代、江戸時代の遺構を確認した。これらの遺構から把握できる過去の土地利用の様相は、以下の通りである。

**弥生時代後期** 調査地北西部の第477-1次発掘区では、集落でよくみられる溝・土坑と土器棺墓の可能性がある土器埋納遺構を確認した。また、遺構の埋土や湿地の堆積層である暗褐色土層から甕・壺・高杯等の日用的な土器が出土した。以上のことから、調査地北西部付近が当時の集落の一画であったことがうかがえた。

**奈良・平安時代** 奈良時代の遺構は、三・六坪坪境小路の東側溝の推定位置で確認した溝S D02だけ、六坪の宅地に関連する建物・井戸・土坑といった遺構や、六坪の北を画する四条条間路の遺構はみられなかった。

溝S D02は、第311次発掘区で埋土から奈良時代前期の土器が出土したことから、平城京造営当初から存在した可能性がある。幅が10m以上で坪境小路の側溝としては広いので、性格については今後検討の余地がある。

宅地に関連する遺構がみられないのは、宅地として利用されずに空閑地であったことを示すと考える。

平安時代の遺構はみられなかった。おそらく奈良時代と同様に空閑地であったためと推測する。

**鎌倉・室町時代** 調査地南西部の第311次発掘区で確認した粘土採掘坑群しかなく、土地利用の詳細を把握す

ることはできなかった。ただし、市第452-2次調査において、前述の溝S D02内の上位で確認した瓦器片を含む埋土について土壤分析を行った結果、イネのプラントオパールを検出したことから、鎌倉時代頃に付近で水田が営まれた可能性はあると考える。

**江戸時代** 水田畔に沿う溝・耕作溝・土坑といった耕地に関連する遺構と、粘土採掘坑群を確認した。前者は調査地内で広範にみられることから、広く耕地として利用されたことが把握できた。

調査地南寄りで確認した東西方向の耕作溝には、溝の方向が方眼方位西のものと、それよりやや北に振れるものとがあり、後者は前で示した明治時代初期の東西方向の水田畔と方向が整合した。このことは、江戸時代の間に地割が一度変更されており、変更後の地割が明治時代初期まで存続したことを示すと考える。

## 3 今後の課題

調査成果から把握できる弥生時代後期から江戸時代にかけての景観の変遷は、上図に示す通りである。

鎌倉・室町時代の旧河川や土地利用の様相はよくわからなかったが、奈良・平安時代の旧河川である河川06が鎌倉時代以降に埋め立てられるのは河川の付け替えを伴う大規模な開発があったことを反映する可能性があり、今後周辺で実施する発掘調査では、この時代の旧河川や遺構の確認にも留意する必要がある。

（安井宣也）

## (2) 平城京左京四条五坊七坪の調査 第477-2次

### I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京四条五坊七坪の北東辺にある。現状は宅地である。付近が市街地化したのは戦前で、かつては水田であった。また、明治時代中頃の2万分の1地形図から、調査地のすぐ西側が当時池であったことがわかっている。

七坪内では過去に6度の調査を実施しており（市第71次：昭和58年度、市第377-5次：平成9年度、市第452-1次：平成12年度、市第462-1～3次：平成13年度）、弥生時代後期から江戸時代にかけての遺構を確認した。また、明治時代中頃の2万分の1地形図に示された池は、今回の調査地のすぐ西側で実施した市第71・462-2次調査で確認した。

今回の調査地は、市第462-1次調査の北発掘区のすぐ北側で、明治時代中頃の池を確認した市第71次調査地は現状の道路を挟んですぐ西側に位置する。今回の調査は、七坪北辺部の様相と明治時代中頃の池の東限を確認することを目的として実施した。

### II 調査の概要

層序 基本的には、造成土（厚さ0.8～0.9m）の下に、水田耕土の灰褐色砂質土（厚さ0.2m）、黄灰色粘土（厚さ0.3m）、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器を含む暗灰色砂質土（厚さ0.2m）があり、部分的に灰色砂を挟んで、明棕灰色砂質土又は灰色粗砂の地山となる。黄灰色粘土上面は江戸時代の遺構面で、その標高は66.0mである。地山上面の標高は65.6mである。

検出遺構 遺構検出は、黄灰色粘土、暗灰色砂質土及び地山の各上面で行った。後二者においては遺構はみられなかったが、黄灰色粘土上面では江戸時代の溝1条、

土坑1基と耕作溝を確認した。

**S D27** 発掘区西寄りで確認した幅0.4～0.6mの南北溝。西肩からの深さは0.1mで、東肩は西肩に比べ0.2m高い。溝の方向は方眼方位北に対しやや東に振れる。土層断面で東肩に沿う畦畔が確認できることから、水田の東辺を画す区画溝と考える。

なお、溝と重複する3間（3.6m）以上の南北方向の掘立柱塀を確認した。柱穴全ての底に扁平な石が礎板として据えられており、埋土から煉瓦が出土した。溝の位置を踏襲して設けられた宅地の区画塀と考える。

**S K28** 発掘区北西辺で検出した長辺28m、短辺1.3mの平面長方形の土坑で、深さは0.2m。埋土は暗茶褐色粘質土で、埋土から江戸時代の土器、瓦類や漆器の破片が出土した。

出土遺物 土器、瓦類、木製品が遺物整理箱3箱分出土した。土器には、暗灰色砂質土から出土した弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器と、土坑S K28から出土した16世紀後半以降の瓦質土器、17世紀以降の陶磁器（肥前系など）がある。瓦類には、土坑S K28から出土した巴紋軒丸瓦片がある。木製品には土坑S K28から出土した漆器片がある。

### IIIまとめ

奈良時代の遺構はなかった。南に隣接する市第462-1次調査地で確認した同時代の遺構が掘立柱塀1条（SA12）と希薄なことをふまえれば、七坪北辺部は空開地に近い状態であった可能性が高い。

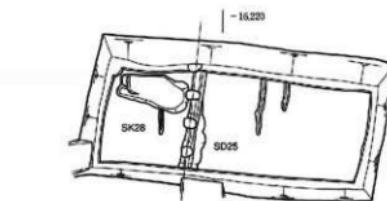
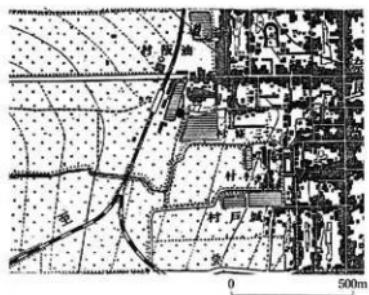
明治時代中頃の池の東限については、発掘区内で江戸時代の遺構が残っていたことから、調査地西側を通る現状の道路付近であると判断する。  
(安井宣也)



第477-2次調査 発掘区全景（黄灰色粘土上面、西から）



同左（地山上面、西から）

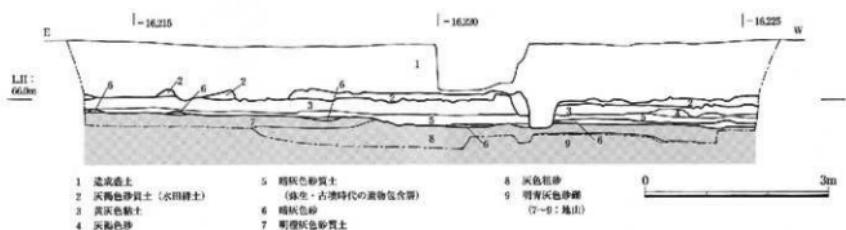
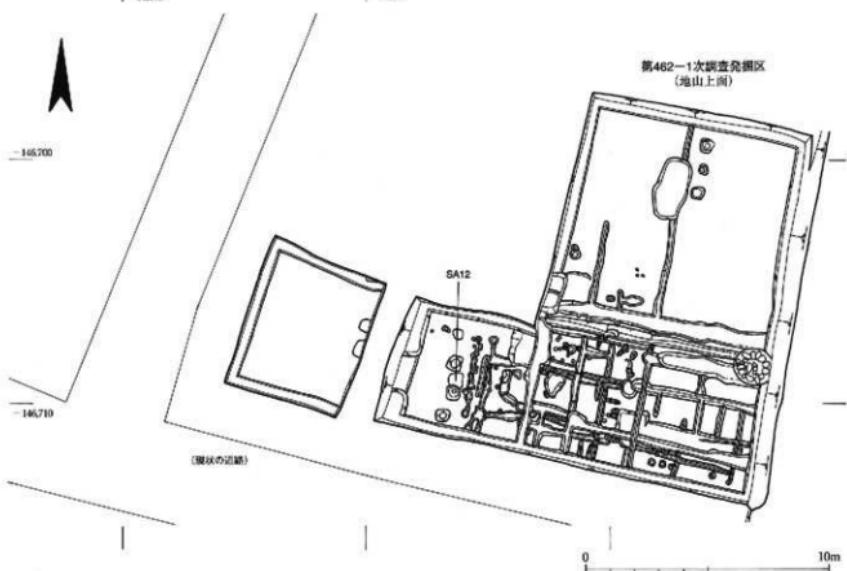


第477-2次調査発掘区  
(黄灰色粘土上面)

明治時代中頃の調査池周辺 1/20,000

-16.210

-16.230



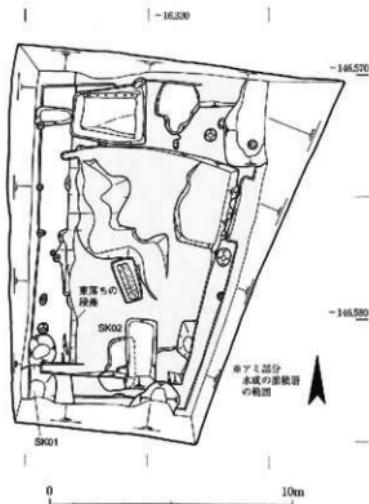
第477-2次調査 造構平面図(黄灰色粘土上面) 1/200 (上)、南壁土層図 1/80 (下)

### (3) 平城京左京四条五坊八坪の調査

第477-7次



第477-7次調査 発掘区全景（南から）



第477-7次調査 造構平面図 1/200



第477-7次調査 発掘区南壁土層（北から）

#### I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京四条五坊八坪の北西辺で、一坪との坪境小路である東五坊坊間西小路のすぐ東側にある。

三条大路を挟んですぐ北側の左京三条五坊五坪内で平成11年度に実施した市第429-4次調査では、発掘区の西辺で東五坊坊間西小路の東に沿う南北方向の堤防造構(SX01)と、その東側で旧河川の氾濫により形成された砂・シルト層を確認した。堤防造構SX01は、高低差が0.7mある東落ちの段差の上端に沿って0.3~0.7mの盛土で構築されている。築造時期は不明であるが、砂・シルト層から奈良時代の土器片と籌木・曲物等の木製品が出土したことから、奈良時代の可能性を考える。

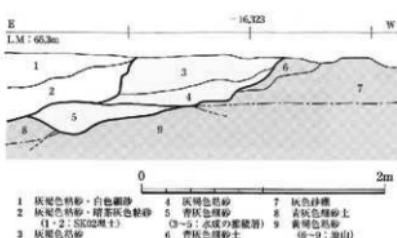
今回の調査地は、市第429-4次調査地の南延長上にある。調査に先立ち、造構の様相を把握する試掘調査を実施したところ、前述の市第429-4次調査地と似た砂・シルト層を確認し、同様の造構の存在が予想されたので、発掘調査を実施することとなった。

#### II 調査の概要

**層序** 基本的には、造成土(厚さ1.5m)下に水田耕土の黒灰色土(厚さ0.2m)があり、西辺約2mの範囲ではこの下で灰色砂礫または青灰色細砂土の地山となる。地山上面の標高は概ね65.2mである。

その東側約5~8mの範囲では、地山上面は南北方向の東落ちの段差を挟んで0.5m低くなる。その位置は、前述の市第429-4次調査地で確認した段差の南延長上にある。その東側では、灰褐色や青灰色の砂や粘砂からなる水成の堆積層で埋まっており、市第429-4次調査地と似た状態となっている。この層から時期不明の下駄、薄板や加工木片が出土した。

**検出造構** 発掘区西辺では地山上面、その東側では水



第477-7次調査 発掘区南壁土層図 1/40

成の堆積層最上層の灰白色細砂と地山の各上面で遺構検出を行い、土坑2基（SK01・02）を確認した。

SK01は、発掘区南西隅の地山上面で、東西1.0m分、南北1.2m分を確認した。深さは0.7m。埋土は上から灰褐色砂質土、暗青灰色粘土。埋土から江戸時代の土器片が出土した。

SK02は、発掘区南辺において、灰白色細砂上面で確認した。東西1.2m、南北1.0mの平面隅丸方形で、深さは0.6m。埋土は上から灰褐色砂質土、暗灰褐色粘土。出土遺物はなく、時期は不明である。

**出土遺物** 土器、木製品が遺物整理箱1箱分出土した。土器には、土坑SK02から出土した17世紀前半の土師器皿と肥前系の陶磁器がある。木製品には、地山上面の段差の東側を埋める水成の堆積層から出土した時期不明の下駄、薄板、加工木片がある。

### Ⅲまとめ

調査地周辺で東五坊間西小路のすぐ東側の地域で実施した調査には、北方では前述した左京三条五坊五坪内の市第429-4次調査があり、南方では左京四条五坊六坪内で実施した市第311・452-2次調査、同七坪内の市第464次調査等がある。

南方の六・七坪内で実施した各調査では、小路の東側溝の推定位置に幅13m、深さ0.5m程度の奈良時代の南北溝を確認している。六坪内の市第311次調査地（平成6年度）では、溝内に奈良時代前期の遺物を含む泥層が堆積する。市第452-2次調査地（平成12年度）では、奈良・平安時代の旧河川がこれを分断する。七坪内の市第464次調査地（平成13年度）では、奈良・平安時代の旧河川がこれを分断し、奈良・平安時代の遺物を含む泥層が旧河川から溝内に及んで堆積する。以上のことから、この溝は奈良時代前期に掘削されて平安時代に埋没したことなどがうかがえ、溝内では河川のような水の流れはなかったとみる。溝の中軸線は方眼方位北に対し $0^{\circ} - 30^{\circ}$ 程度東に振れており、やや西に振れる平城京の条坊の造営方位とは異なる。

今回の調査において地山上面で確認した南北方向の東落ちの段差は、すぐ北方の市第429-4次調査地の地山上面で確認した段差の南延長上に位置し、ともにその東側が水成の堆積層で埋まっていることから、両者が一連である可能性が高い。また、南方の市第464次調査地で確認した南北溝の西岸の北延長上にあたり、出土遺物の時期も考慮すれば、東落ちの段差がこの溝の北延長部分の西岸にあたる可能性もあり得る。

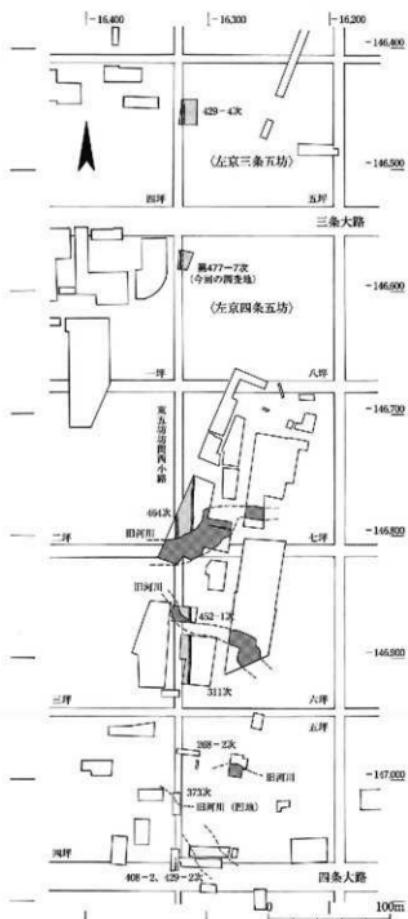
堀井・伊達（1972）<sup>1)</sup>は、調査地南方の南京終町から北之庄町にかけて東五坊間西小路の南延長上で門地地

形を示す池が南北に連続することや河道の痕跡がみられること等を根拠とし、平城京の東限を画する溝渠の存在を想定している。今回の調査地とその周辺において東五坊間西小路の東側で確認した東落ちの段差や南北溝と想定した溝渠とは、位置的に対応するものの、遺構の全容が把握できていないため、両者の関連についてはなお検討の余地がある。

（安井宣也）

1) 堀井甚一郎・伊達宗泰 平城京域内河川の歴史的変遷に関する研究

〔平城京の復原保存計画に関する調査研究〕 奈良市企画課（1972）



東五坊間西小路東側の遺構の様相 1/4,000

## (4) 平城京左京四条四坊十六坪の調査 第477-8次

### I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京四条四坊十六坪の北端部ほぼ中央にある。

十六坪内では、これまでに12ヶ所の発掘調査を実施しているが、その結果からみると、出土遺物が多く、未発掘部分も多いので、宅地利用の変遷について述べるには困難が多い。しかし、遺構の重複関係、建物配置、坪内道路の存在から少なくとも3時期以上の変遷を考えられる。奈良時代当初は坪の中心部分に掘立柱塀SA225、SA226、SA227を巡らせ、方形区画を形成する一坪利用の宅地であったようである。しかし、その後、十六坪側の道路側溝の心々距離の1/2ラインを通る東西方向の坪内道路を設けることにより、坪内を南北とし、一坪を1/2に分割して利用するようになったことがわかつている。この坪内道路の側溝埋土から奈良時代末の遺物が出土していることから、坪内道路が機能していたのは奈良時代末までと考えられる。これより新しい遺構については平安時代のものである可能性が考えられている。

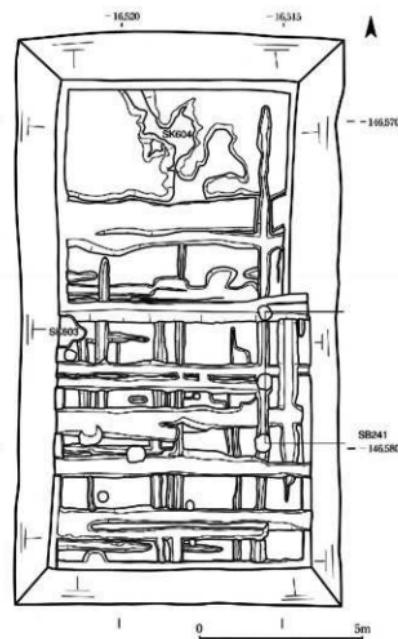
また、坪の北半では三条大路南側溝が想定される位置で発掘区を設定したが（市第408-1次調査北発掘区（平成10年度）、市第429-1次調査（平成11年度））、粘土探柵坑と思われる土坑によって奈良時代の遺構は削平されており、条坊に関する遺構は検出できなかった。

市第429-1次調査で検出した掘立柱塀や土坑が東に続いていれば、今回の発掘区で検出されることが想定され、これらの遺構の有無の確認も今回の調査の目的であった。

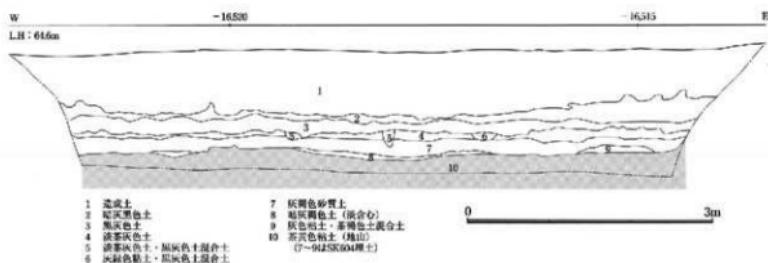
### II 層序

発掘区内の基本的な層序は、上から造成土（0.5~0.8m）、暗灰黒色土（旧耕土・0.2m）、黒灰色土（旧耕土・0.2m）、淡灰茶色土（床土）と続き、現地表下1.2m

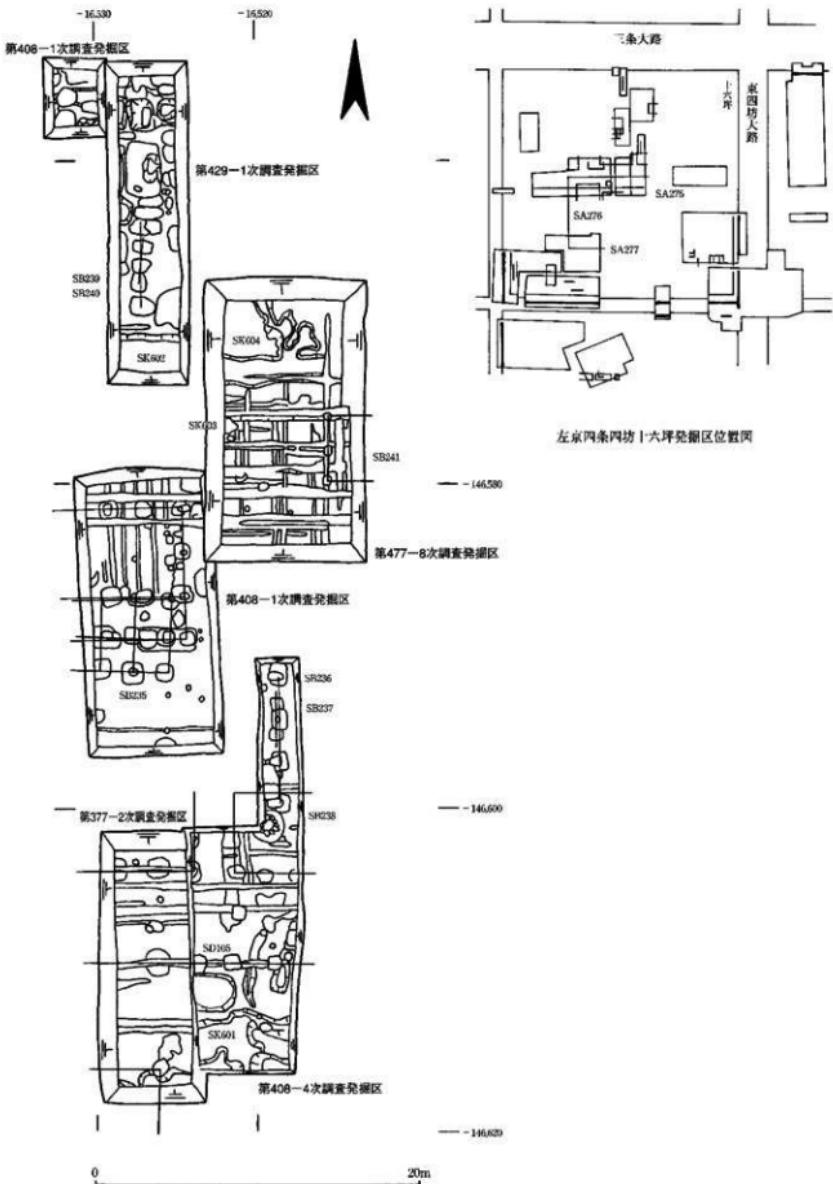
で茶黄色粘土の地山上面にいたる。発掘区北半部では、淡灰茶色土の下で、部分的に淡灰色粘土と黄茶色粘土が混ざった整地土を確認した。遺構はこの整地土と茶黄色粘土上面で検出した。同様の整地土は市第429-1次調査、西南に隣接する市第408-1次調査で検出されており、今回の発掘区でも確認したことから東側にも拡がつ



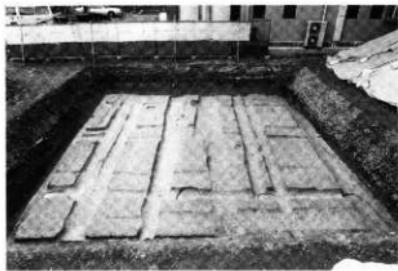
第477-8次調査 遺構平面図 1/150



第477-8次調査 発掘区北壁土層図 1/60



調査地周辺の道路平面図 1/300



第477-8次調査 発掘区南半（東から）

ていることがわかった。遺構検出面の標高は概ね63.3mである。

### Ⅲ 検出遺構

今回の発掘区では粘土採掘坑ではなく、粘土採掘坑は三条大路南側溝が推定される十六坪北端部でおさまるものと思われる。検出した遺構は、奈良時代の掘立柱建物1棟、土坑2である。

**SB241** 発掘区中央やや南寄りの位置で検出した掘立柱建物である。南北2間(4.2m)で、柱間は2.1m(7尺等間)である。発掘区外東へ続く東西棟建物の西側柱列であると考える。

**SK603** 発掘区西辺中央部で検出した東西0.8m以上、南北1.0、深さ0.2mの平面不整形な土坑である。埋上から奈良時代の土器や瓦が出土した。

**SK604** 発掘区北端で、整地土上面で検出した土坑である。規模は東西6.8m以上、南北3.4m以上で、深さは0.2m。隣接する第429-1次調査区の南東隅部のSK602の北側で土坑状の遺構を検出しており、これが同一の遺構であれば、東西の長さは約11mとなる。SK604の埋土からは奈良時代末頃の土器が出土した。炭とともに多数の製塩土器がかたまって出土した箇所があった。製塩土器の中には火を受けた痕跡のある土器片もある。



第477-8次調査 発掘区南半（東から）

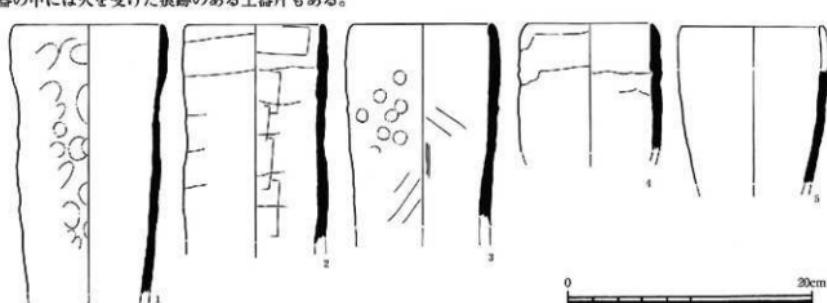
### IV 出土遺物

遺物は遺物整理箱にして9箱出土した。ここでは非常に多くの製塩土器が出土したSK604出土土器について述べる。

SK604からは、土師器杯蓋、皿A、椀A、高杯、壺、須恵器杯A・B、皿B・C、高杯、壺L・M・E、横瓶、壺、風字硯、製塩土器などが出土している。土師器の法量や調整手法、風字硯が出土していることなどから奈良時代末頃の土器群と考えられる。製塩土器が多数出土しており、これについてふれておきたい。

製塩土器は、小片のものが大多数で、復原できるものは少ない。形態はいずれも長脛のものである。底部の形状はよく分からぬが、丸底になると思われる。口縁部は梢円形のものが多い。口径は10.2~12.0cmである。内外面に指頭圧痕や粘土の接合痕がよく残っている。内面にはハケのような工具で調整した跡が残るものが多い。図示したものには布目痕跡はみられない。口縁端部は丸くおさめるものが多いが、3のように若干内傾するものなどもみられる。先述したように火を受けているものもあり、海のない平城京内で製塩土器がどのようにして使われていたのかは興味深い。

(池田裕英)



SK604出土製塩土器 1/4

## 2. 平城京左京五条四坊の調査 第486次 JR奈良駅南特定土地区画整理事業に係る発掘調査

### I はじめに

この調査は、奈良市が進めるJR奈良駅南特定土地区画整理事業（総面積14.6万m<sup>2</sup>）に係り実施した埋蔵文化財調査である。市教育委員会では、平成13年度から事業地の発掘調査を開始しており、今年度で2ヵ年目となる。昨年度は2事業に係り8ヵ所3,583m<sup>2</sup>の発掘調査を行った。今年度は、通常事業に係る調査として標記の通り実施した。

なお、報告に際して用いる遺構番号については、昨年度の例に倣い、坪毎に古墳時代以前の遺構に2桁の番号を、奈良時代以降のものに3桁の番号を付している。発掘区内での基本的な堆積層序は、耕作土である黒灰色砂質土以下、灰褐色砂質土、橙灰色粘土、黒灰色砂質土もしくは暗茶灰色砂質土と続き、現地表下約0.4mで黄白色粘土または黄褐色粘土を主とする地山となる。地山は東から西へ緩やかに下降し、更に北から南へも緩やかに下っている。地山の標高は発掘区北東端で概ね64.2m、発掘区南西端で63.9mである。

発掘区中央ではこの地山上に暗褐色粘土の堆積があり、この堆積土からは弥生時代後期の遺物が出土する。昨年度HJ第468-4次発掘区の一部でも同様の堆積土か



第486次調査 発掘調査位置図 (I-10,000)

らなる流路SD01を確認しており、これに繋がる流路である。本発掘区内を蛇行し、HJ第468-4次発掘区の南部を通って西へ流れる、幅約15m、深さ約0.4mで、もっとも深いところで0.6m程度となる。昨年度の事業地西部での調査においても、幾例かの弥生時代の遺構を検出しており、今回の検出例と合わせて周辺への同時代遺跡の広がりを想定することができる。

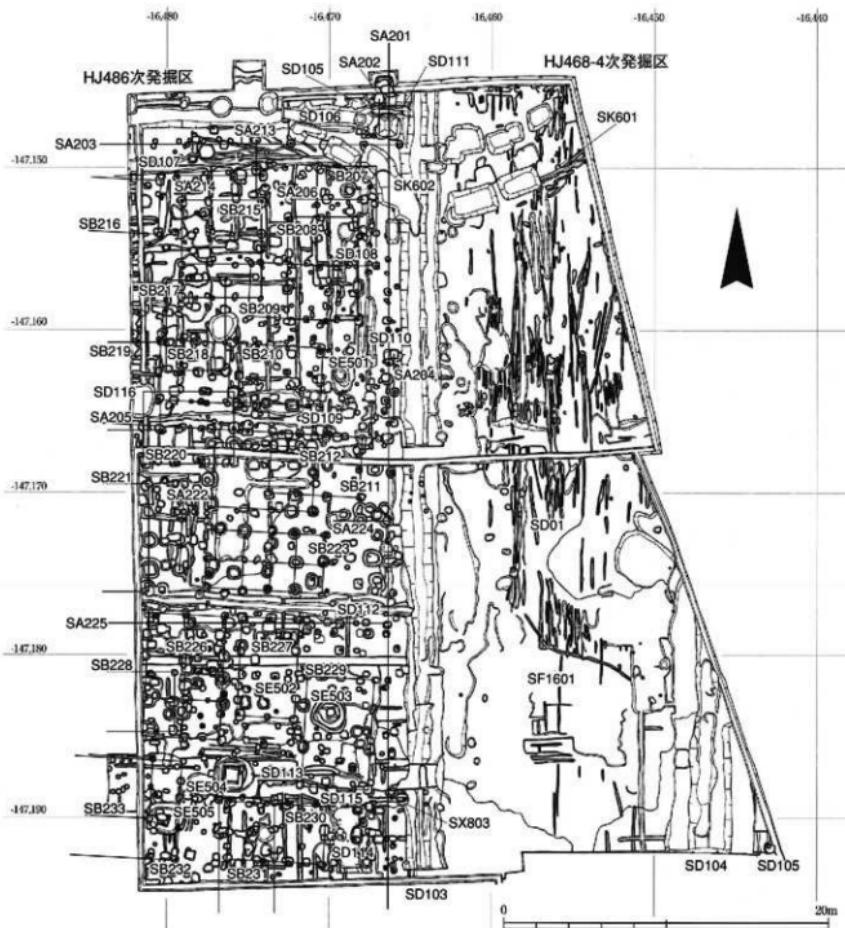
また、黄褐色粘土の下層に構文時代の遺物を包含する堆積層があり、黄白色粘土もしくは黄褐色粘土の下層に

平成14年度JR奈良駅南特定土地区画整理事業発掘調査一覧

遺跡名	調査次数	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
平城京左京五条四坊十六坪・ 東四坊大路	HJ 第486 次	通常事業	大森町 122-1 億	H14.11.20 ~ H15.3.14	1,120 m <sup>2</sup>	立石・原田・池田



第486次調査 発掘区全景航空写真 (北から)



第486次調査 道傍平面図 1/300



東四坊人路全景（北から）



十六坪宅地全景（北から）

あたる黄灰色粘土層上面で縄文時代の石器、土器を含む灰色砂礫を主とした流路を確認した。検出面の標高は概ね63.4mである。発掘区西部の井戸や発掘区北端の上坑の掘削に際して、同様の標高の壁面上からも縄文時代の石器、土器が出土しており、広い範囲に縄文時代の遺跡面があることを想定し得る。

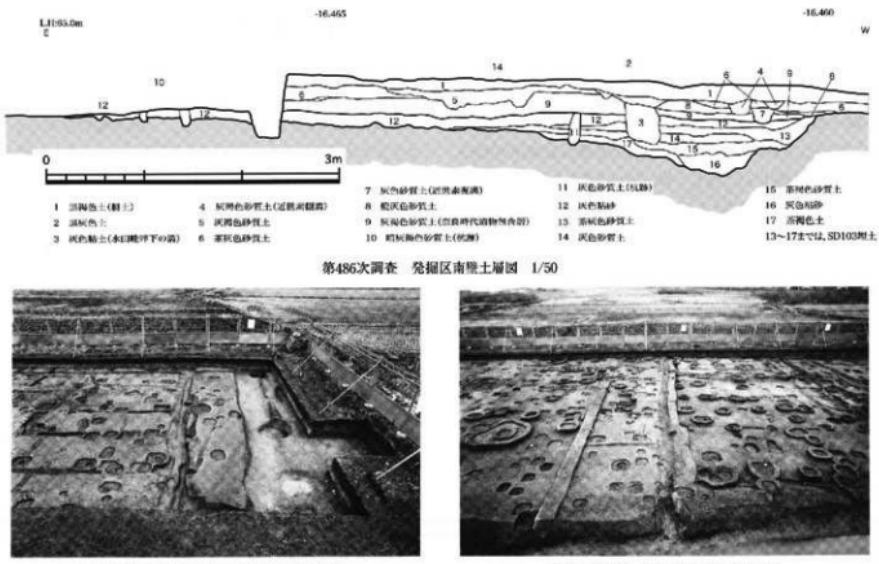
## II 検出遺構

検出した遺構は、前述の下層流路以外は奈良時代以降のものである。遺構は基本的に、黄褐色粘土もしくは黄白色粘土の地山上面で検出したが、発掘区中央の弥生時代流路上面を中心に、茶褐色土を主体とする奈良時代の整地層があり、この面から掘り込まれている遺構も多い。

今回検出した遺構には、東四坊大路、同東西両側溝、左京五条四坊十六坪の東を限る掘立柱塀、坪内を分割する掘立柱塀3条、宅地内を区画する溝8条、溝暗渠1条、掘立柱建物18棟及び塀4条、井戸4基、土坑、溝、さらにも左京五条五坊一坪の西を限る溝がある。なお検出遺構には、昨年度HJ468-4次発掘区で検出した遺構に統くものが多く、今回の調査で新たに関連が明らかになった事柄もあることから、報告では、この発掘区での検出遺構についても併せて触れておく。

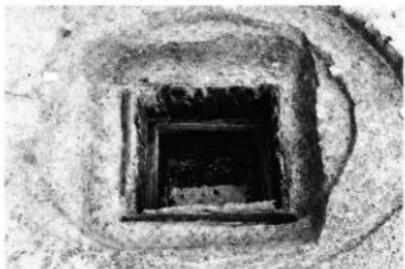
東四坊大路SF1601は、今回東西両側溝を検出し、その幅員を知ることができた。側溝心々間での距離は17.42m（約49大尺）である。この数値は、事業地北側

HJ377-1次調査で検出している幅員に比し、若干であるが広くなる。路面上に舗装などの造作はなかったが、路面の断面形状が東側溝から西側溝にかけて緩やかに下る片流れ状となっている。このため、十六坪宅地側と大路西肩側とに段差が生じ、宅地側が一段高く見える。路面上の標高は東側溝近くで64.2m、路面中央で64.1m、西側溝近くでは64.0mとなる。一方、宅地側の標高は64.1mである。また、発掘区南では路面を厚く覆う灰色粘砂があり、条間北小路との交差点に近いことにより、両側溝の水が路面に溢れる状態にあったことが観えた。東側溝SD104は、幅2.2m、深さ0.5mの素掘りの溝であり、長さ18mを検出した。埋土は大きく3層に分かれ、上層から灰色粘砂、灰褐色砂質土、灰色砂質土となる。側溝心の国土座標値はX = -147,192.00、Y = -16,446.66である。この東側溝の東、五条五坊一坪側に幅約1.6mの空閑地を挟んで平行する溝SD105がある。この溝を築地雨落溝とし、側溝との空間を築地の痕跡と考えることもできようが、現状では判断できない。一方の西側溝SD103は、幅2.4~2.9m、深さ0.6mの素掘りの溝である。長さ26mを検出した。埋土は大きく4層に分かれ、上層から灰色粘砂、茶灰色砂質土、灰色粘土、灰色砂となる。上層の灰色粘砂は東側溝からの溢れとともに路面上を覆うように堆積している。この灰色粘砂からは、10世紀前半の遺物が出土し、第2層の茶灰色砂質土からは



坪1/2分割施設 SA203.SD106・107 (東から)

坪1/4分割施設 SA225.SD112 (東から)



井戸SE504 (南から)

多くの奈良時代末から平安時代初頭の遺物が出土している。側溝心の国土座標値はX=-147,192.00、Y=-16,464.08である。

この東四坊大路西側溝の西に沿って幅約2mの空閑地が続く。中心に昨年度IIJ468-3次調査でも検出した掘立柱塀SA201が延びる。築地を想定できる添柱跡や、雨落溝の痕跡も無いくことから、現状では十六坪の東は築地ではなく掘立柱塀で限ると考えている。

十六坪内では南北二分の一、及び南北四分の一にあたる位置に溝、掘立柱塀があり、坪内を分割して、宅地利用していたことが窺える。

塀SA203は、坪の南北二分の一にあたる位置に設けられた東西方向の塀であり、塀SA201に取り付く。この塀を挟み南北両側溝SD106・107の2条の溝が平行して造られる。この溝と塀によって坪を南北に大きく2分割するものと考える。このうちSD107は南に曲がり、塀SA201に沿う溝SD108に繋がることが、昨年度IIJ第468-3次調査で明らかになっている。

さらに、坪の南北四分の一にあたる位置には東西方向の塀SA225が設けられ、同じく塀SA201に直交して取り付く。

これらの塀SA203・SA225で画される坪の南北四分の一にあたる区画宅地の中に、溝SD107・108・109、及びSD116で囲まれた南北約15mの方形区画がある。東西の範囲については約7mを確認したが、発掘区外西に溝が続くことから、更に西に拡がるものと考える。南側のSD109とSD116の間が開いており、出入口となろうか。この開口部は約6mある。また、塀SA225の南にも溝SD113とSD114により画される同様の区画がある。この両区画は、塀SA225からほぼ等間隔にあり、さらなる宅地内の細分を窺わせる。これらの溝、塀はほぼ国土方眼方位に沿っており、掘立柱建物・塀・溝にもこれと方位を同じくするものがある。

一方で、坪内を分割するものの中に、塀SA205、溝SD112・115のように、国土方眼方位西で北に約3°振



井戸SE505 (東から)

れるものがある。SA205は、SD109・116のすぐ南に造られた東西方向の掘立柱塀で、昨年度の調査でSA201に繋がることが分かっている。SD112はSA225の北側に造られた東西方向の溝で、大路西側溝に繋がる。同じくSD115はSD113に重複する位置に造られた東西方向の溝で、溝西端がSD113とはほぼ同じ位置にある。宅地東限の塀SA201を暗渠SX803で抜け、大路西側溝に繋がる。掘立柱建物の中に、この区画溝に方位を同じくするものがある。

これら十六坪内の遺構は、重複関係により、国土方眼方位に沿うものから約3°の振れをもつものへと移り替ることが分かる。それぞれに少なくとも2時期の重複がみられるため、幾度かの建て替えがあったのである。しかし、その際にも、大きく南北を二分する分割は変わることなく踏襲しているようである。

### Ⅲまとめ

事業地の東端で行った今回の調査では、東四坊大路とその両側溝を検出することができ、大路の幅員を明らかにすることができた。大路は、側溝埋土内出土遺物からみて少なくとも10世紀前半まで機能していたことが窺えた。ただし、側溝最終埋土が大きく路面上にまで溢れていることから、路面の高い部分だけがかろうじて道路の形態を保つような状態にあったようである。

一方、五条四坊十六坪宅地内では、昨年度の調査と同様、坪内東端での調査ではあったが、坪が大きく南北二分の一に分割され、さらに溝及び掘立柱塀により四分の一に細分利用されていることを追認した。宅地内は非常に遺構密度が高く、幾度かの建て替えがあったことが明らかである。ただし、その建て替えの中に、坪の分割については踏襲しているにも関わらず、建物、溝などの計画方位を大きく違える時期があることを今回の調査では明らかとし得た。奈良時代末から平安時代初頭の時期にこの変化がみられるようであるが、その成因は現段階では不明である。

(立石堅志)

### 3. 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に係る調査

この調査は、奈良市が進める西大寺駅南地区土地区画整理事業（総面積約30万m<sup>2</sup>）に係り実施した埋蔵文化財発掘調査である。奈良市教育委員会では、昭和63年度から事業地内の発掘調査を継続して実施している。

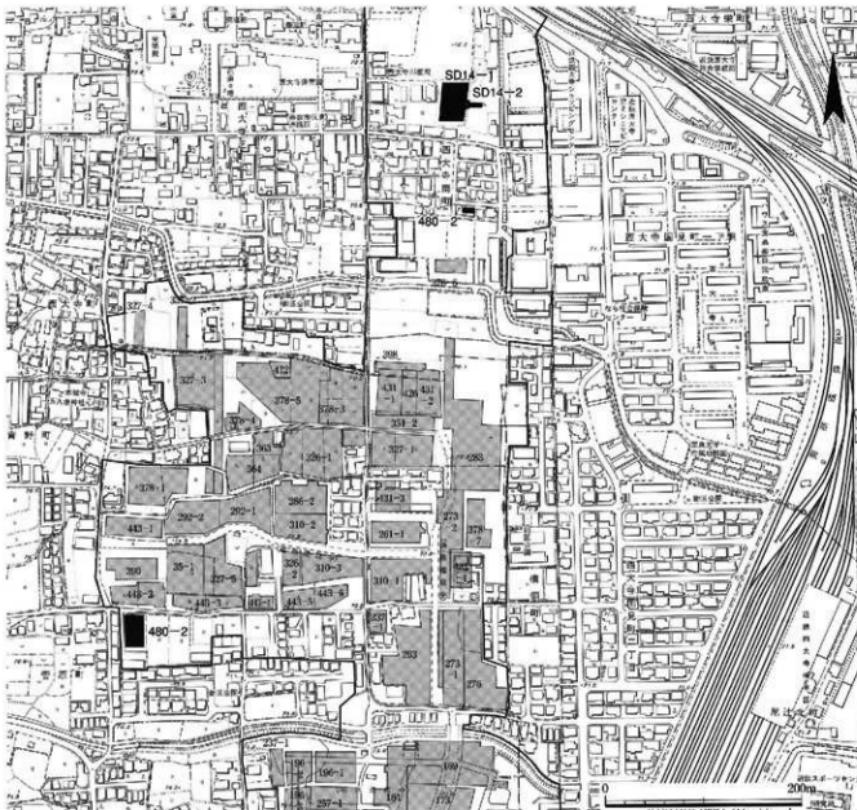
下表の通り、平成14年度は促進事業として、4箇所で発掘調査を実施した。調査面積は1,782m<sup>2</sup>であり、初年

度からの総発掘調査面積は101,129m<sup>2</sup>になる。

平成14年度の調査地は、平城京右京二条三坊一・十二坪と西大寺旧境内（右京一条三坊四坪）に及ぶことから、坪ごとに報告する。遺構番号は、坪ごとの通し番号とし、古墳時代以前を2桁、奈良時代以降を3桁で明示している。

平成14年度 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業地内発掘調査一覧

遺跡名	調査次数	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
平城京右京二条三坊十二坪	HJ480 - 1	促進事業	若原町 247-1	H14. 6. 3 ~ 8. 1	650 m <sup>2</sup>	松浦・宮崎・繩川
平城京右京二条三坊一坪	HJ480 - 2	促進事業	西大寺南町 2390-8 他	H14.12.20 ~ 12.25	45 m <sup>2</sup>	宮崎・池田
西大寺旧境内	SD14 - 1	促進事業	西大寺南町 2413	H14. 9. 2 ~ 12. 3	1,000 m <sup>2</sup>	松浦・宮崎・池田
(平城京右京一条三坊四坪)	SD14 - 2	促進事業	西大寺南町 2364 他	H14.12. 9 ~ 12.26	87 m <sup>2</sup>	宮崎・池田



近鉄西大寺駅南土地区画整理事業地内発掘調査位置図 1/5,000

# (1) 平城京右京二条三坊十二坪の調査 第480-1次

## Iはじめに

調査地は平城京右京二条三坊十二坪の北西隅にある。当該地の北と西に現存する道路は、坪境小路の遺存地割りとされている。平成12年度には調査地の北にある東西道路の北側で、十一・十二坪坪境小路を検出している(市HJ443-3次調査)。

## II 検出遺構

調査地の現況は田及び畠で、一帯は南西から北東へ緩やかに傾斜している。発掘区内での基本層序は耕作土以下、橙灰色・灰茶色・灰黄色砂質土、茶灰色・黄灰色粘砂が続き、地表面から0.2~0.5mで、淡黄色粘質土や橙灰色砂礫の地山に至る。地山の標高は、南西で約74.8m、北東で約74.5mである。遺構は基本的に地山面で検出したが、発掘区南西部の地山上面に黄茶色粘砂によ

る奈良時代の整地が行われており、この整地土の下層にも奈良時代の遺構面があることが分かっている。

検出した主な遺構には、古墳時代の溝2条、奈良時代後半~末葉の掘立柱建物10棟、塚2条、土坑3、坪内道路1条、平安時代の掘立柱建物2棟、塚1条、土坑1がある。以下、時代ごとに述べる。

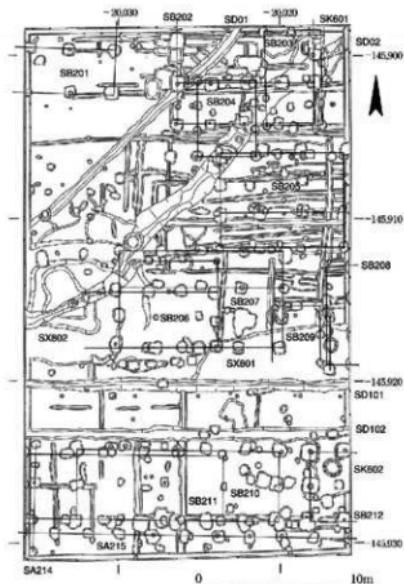
**古墳時代** 溝2条があり、ともに北東に振れる素掘りの溝で、発掘区外に続く。

S D01は幅0.6m、深さ0.3~0.4m、長さ17mを検出した。埋土から古墳時代中期の土師器が出土した。S D02は幅1.3m、深さ0.5~0.7m、長さ26mを検出した。溝内埋土は上下2層に大別でき、下層からは古墳時代中期の土師器が、上層からは古墳時代後期の埴輪、土師器、須恵器が出土した。

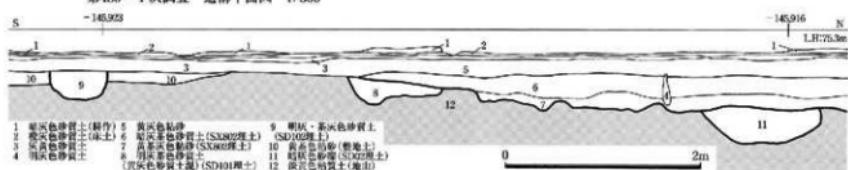
## 奈良時代以降

**奈良時代後半** 掘立柱建物8棟、塚1条、土坑1がある。発掘区中央付近に建物が密集する。

S B202は桁行4間(8.4m)、梁間2間(3.6m)の東西棟建物で南に庇が付く。北側にも庇が付く可能性がある。柱間は桁行が2.1m、梁間が1.8m等間、庇の出が2.4mである。S B203は桁行3間(5.7m)、梁間2間(3.4m)の南北棟建物で、重複関係からS B202よりも新しい。柱間は桁行が1.7~2.1mで、梁間が1.7m等間である。S B206は桁行3間(6.3m)以上、梁間2間(3.6m)の東西棟建物で北に庇が付く。柱間は桁行が2.1m、梁間が1.8m等間である。S B207は桁行4間(10.0m)、梁間2間(3.6m)の東西棟建物で北に庇が付く。柱間は桁行が2.5m前後で、梁間は1.8m等間、庇の出が2.1mである。重複関係からS B206よりも新しい。S B208は南北3間(6.0m)、東西1間(1.5m)以上の建物である。発掘区外東に続く。柱間は南北方向が北から2.1~1.8~2.1mである。S B209は南北棟建物で、桁行2間(3.6m)以上、梁間1間(1.5m)となる。柱間は桁行が1.8m等間である。重複関係からS B208よりも新しい。S B207とは直接の重複関係はみられないが、重なる位置



第480-1次調査 遺構平面図 1/300



第480-1次調査 発掘区西壁上層 1/50

にある。S B210は桁行6間(12.6m)、梁間2間(4.2m)の東西棟建物で、柱間は2.1m等間である。S B211は桁行5間(12.0m)、梁間2間(4.2m)の東西棟建物である。重複関係からS B210よりも新しい。柱間は桁行が2.4m、梁間が2.1m等間である。S A215はS B210・211の南に位置する東西10間(20.0m)以上の掘立柱塀で、発掘区外に続く。柱間は2.0m等間である。重複関係からS B211よりも新しい。S K601は南北1.5m以上、東0.75m、深さ0.7mの平面隅丸方形の土坑である。発掘区外北に広がる。重複関係からS B202・203よりも新しい。

奈良時代末～平安時代初頭 発掘区南西部が整地された後、坪内道路により宅地が分割される。掘立柱建物2棟・塀1条、土坑2がある。

S F901は坪内北1/4の位置に造られた東西方向の道路である。側溝心々間の幅で3.0m、長さ約20mを確認した。発掘区外に続く。S D101は、この坪内道路の北側溝で、幅0.4～0.8m、深さ0.3mの素掘りの溝である。側溝心の国土座標値はX=-145,920.600、Y=-20,030.000である。S D102は南側溝であり、幅0.6～0.9m、深さ0.3mの素掘りの溝である。側溝心の国土座標値はX=-145,923.600、Y=-20,030.000である。この両側溝埋土からは、ともに8世紀後半～9世紀初頭の土器が出土した。

S B205は桁行3間(7.5m)以上、梁間2間(3.6m)の東西棟建物で南に庇が付く。柱間は桁行が2.5m、梁間が1.8m等間、庇の出が2.1mである。S B204は桁行3間(4.6m)、梁間2間(3.5m)の南北棟建物である。重複関係からS B205よりも新しい。柱間は桁行が1.2～1.6m、梁間が1.5～1.9mと一定でない。S A214は南北3間(6.5m)の掘立柱塀で、発掘区南に続く。柱間は北から2.3～2.3～1.9mである。S K602は南北4.0m、東西3m以上、深さ0.3mの平面方形の土坑である。発掘区外東に広がる。埋土から8世紀後半～9世紀初頭の土器が出

た。重複関係からS D102よりも古いことが明らかである。S X801は南北3.5m、東西10m以上、深さ0.3mの溝状の土坑である。発掘区外東に広がる。重複関係からS D101よりも古い。埋土から8世紀後半～9世紀初頭の土器が出土した。

平安時代前半 坪内道路側溝埋没後の遺構である。掘立柱建物2棟・塀1条、土坑1がある。

S B201は桁行2間(5.2m)以上、梁間1間(2.6m)以上の東西棟建物で南に庇が付く。柱間は桁行、梁間ともに2.6m等間である。S B212は桁行1間(2.1m)以上、梁間2間(4.2m)の東西棟建物で、発掘区外東に続く。重複関係からS K602よりも新しい。柱間は桁行、梁間ともに2.1m等間である。S A213は南北2間(3.3m)の掘立柱塀で、柱間は北から1.8～1.5mである。建物西妻柱の可能性もある。重複関係からS X801よりも新しい。S X802は南北9.0m、東西8m以上、深さ0.5mの平面方形の土坑である。発掘区外西に広がる。重複関係からS D101よりも新しい。

(宮崎正裕)

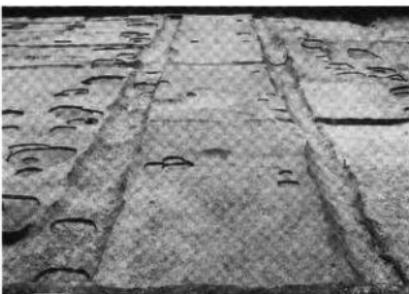
出土遺物 瓦と土器・土製品が遺物整理箱で48箱分ある。その他に繩羽口が2点、鉄が2点、砥石が2点、サヌカイト製スクレイパーが1点、同剥片が4点、漆片、壁土片などがある。

瓦 軒瓦、丸瓦、平瓦がある。軒瓦は4点あり、すべてが遺物包含層出土の軒丸瓦で、内訳は6281型式A種、6284型式D種が各1点、型式不明が2点である。丸瓦、平瓦は大半が奈良・平安時代のもので、数量は丸瓦が15点(1,090g)、平瓦が19点(1,070g)、丸瓦か平瓦いずれか不明が6点(60g)である。

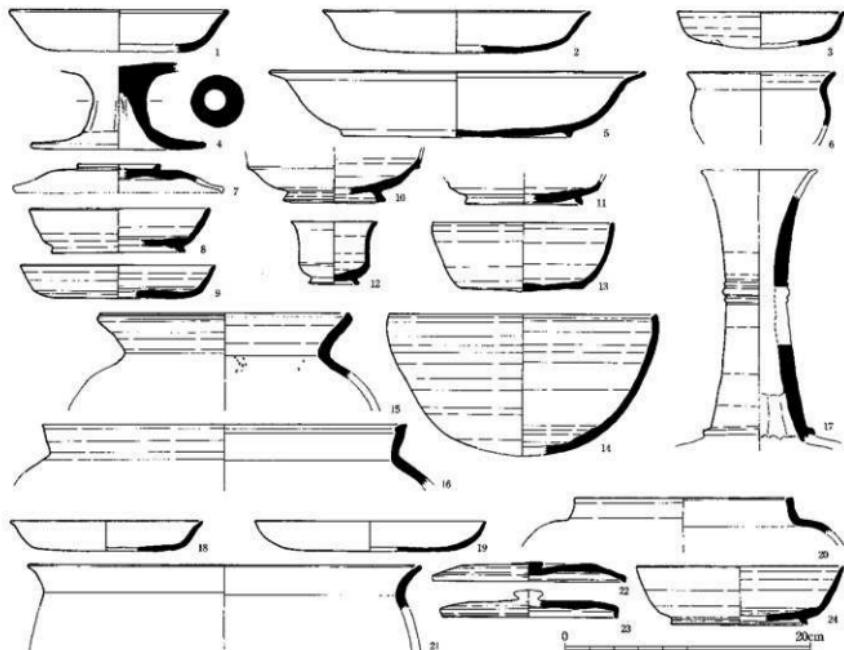
土器・土製品 墓輪・古墳時代の土師器と奈良・平安時代の土師器、須恵器、黒色土器A類、硯、壺、瓶、製塙土器、ミニチュア瓶、硯、墨書き土器(須恵器2点)がある。以下、S D101・102、S X801出土土器について述べる。



第480-1次調査 発掘区全景(南東から)



SF901とSD101・102(東から)



SD101・102、SX801出土土器 1/4

SD101出土土器（1～16）には、土師器杯A（1）、蓋、皿A（2）、椀C（3）、高杯（4）、鉢A、壺A、盤B（5）、甕（6）、製塙土器、須恵器杯A・B（8・11）、杯B蓋（7）、杯E（13）、皿A（9）、椀A、小椀（12）、稜椀（10）、鉢A（14）、甕、壺蓋、甕（15・16）がある。3は口縁部上半をヨコナデ、底部外面をナデで調整する。7は環状鋸の蓋であり、内面は硯に転用されている。9は底部外面と、底部内面から口縁部への立ち上がり部分をロクロケズリで調整する。10は高台が壺類のように高くて、幅が広い。底部内面の調整は丁寧である。体部外面の後から下はロクロケズリで調整する。胎土は緻密で明灰白色である。11は他の杯Bに比べ、高台が底部の内側寄りに付き、断面形は三角形に近い。14は丸底気味である。SD102出土土器には、土師器皿A、蓋、杯類、羽釜、盤、甕、須恵器杯A・B、長颈甕（17）、甕がある。17は頸部中央と頸部楕円元に、ロクロナデで凹凸を表現した突帯が付く。SD101・102出土土器には、土師器杯A（18）・B・C、蓋、皿A（19）・C、椀A、高杯、壺A（20）・E、盤、甕、甕（21）、須恵器杯B（24）、杯B蓋（22・23）、鉢A、壺、壺蓋、鉢、壺輪がある。18は底部外面に黒斑が残る。22は器面が摩滅し、墨が付着することから転用硯と考えられる。これらの土器は、8世紀後半～9世紀初頭の特徴をもつが、土師器食器類には8世紀後半のものが多い。

（宮崎正裕、池田富貴子）

### 三 まとめ

十二坪の遺構変遷の概要は次のとおりとなる。

奈良時代前半の遺構は確認できなかったので、その様相は不明であるが、奈良時代後半になると、短期間に内にS B202→203、S B206→207、S B208→209、S B210→211のように頻繁に建物が建て替えられることが分かる。また、東西塀S A215が造られており、この時期から坪を分離して利用していたことが窺える。

奈良時代末になると、坪の北1/4の位置に東西道路S F901が造られ、坪内を道路で分割するようになる。また、この道路以北に建物が集中する傾向がある。

平安時代になってすぐに、坪内道路は廃絶する。遺構は少なく、閑散とした状況にあったようである。

（宮崎正裕）

## (2) 平城京右京二条三坊一坪・一条南大路の調査 第480-2次

### Iはじめに

調査地は、平城京の条坊復元では一条南大路に当たり、すぐ東側が西二坊大路との交差点となる。敷地の北側には西大寺旧境内が、南側には右京二条三坊一坪が推定される。今回の調査は、一条南大路に関わる条坊遺構の検出を主目的に実施した。

### II 検出遺構・遺物

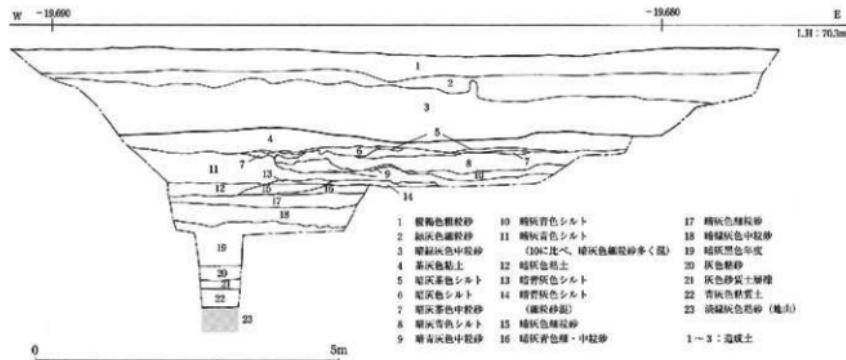
調査地の現況は宅地で、基本層序は造成土(1.4m)の直下にシルト層(2.9m)が堆積し、地表面から4.3mで淡緑灰色粘砂の地山に達する。地山の標高は概ね66.7mである。土層の堆積状況から、発掘区全体が南北方向の流路内にあることが判明した。このシルト層は地面上1.7~1.8m程度までは、0.1~0.8mの厚さで、ほぼ水平に堆積する。その上層では、流路内の流れが幅を狭め、場所を移しながら流れていたよう、厚さ0.1m程度の溝状の堆積が幾重にも見られた。遺物は、流路内の暗灰青色シルト層(北壁土層断面図の11層)から上部器片が1点出土したのみで、流路の形成から埋没までの経過を明らかにするには至らなかった。

ところで、平成14年度に当該地の北約100mで、近世に埋没した流路を検出している(市SD14-2次調査)。位置関係からみて、今回検出した流路はこの流路と同一のものであり、更に南へと流れていった可能性が高い。この調査時の西肩位置からみて、今回検出した流路についても、発掘区から西へ5m程度で西肩に達すると考える。また、一坪中央付近で実施した市HJ378-6次調査とその西側の国第183-14次調査では東西方向の大きな流路の北肩を検出している。おそらく、一坪の東側で今回検出した南北流路と合流するものと考えている。

### IIIまとめ

今回、発掘区が狭小であったこともあり、想定していた一条南大路に関わる遺構は検出できなかったが、条坊道路の位置に大きな流路が広がることを確認した。

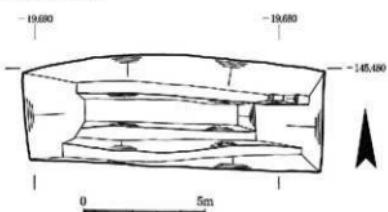
今後、この流路が、近年類例が知られているように堀割状に施工されていた条坊道路を踏襲したものか、または、何らかの新たな要因によって、偶然にも旧条坊道路上に開削されたものであるかを明らかにしていく必要がある。(宮崎正裕)



第480-2次調査 発掘北壁土層図 1/80



第480-2次調査 発掘区全景(南西から)



第480-2次調査 遺構平面図 1/200

### (3) 西大寺旧境内の調査 第14-1・2次



第14-1・2次調査 発掘区位置図 1/6,000

#### I はじめに

調査地は西大寺旧境内の東端に想定される寺地の一角で、現況は畑と水田である。西大寺創建前の平城京の条坊では右京一条三坊四坪の北半に当たり、調査地北端には坪境小路が想定される。東端の一段低い水田畦畔は西二坊大路の遺存地割と考えられている。調査地西半の畑から東端の水田にかけて発掘区を設定した。

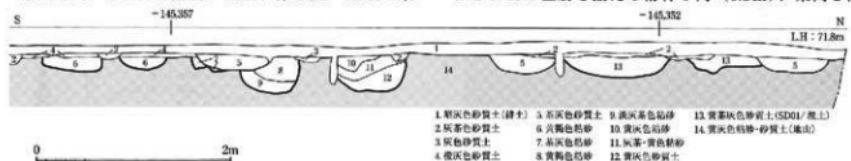
#### II 検出遺構

発掘区内の基本層序は、耕作土以下、淡黄灰色粘質土、橙茶色砂疊と続き、地表面から0.4mで黄灰色粘砂の地山に至る。地山の標高は、概ね西北で71.5m、南東で71.3mである。発掘区東端の水田では、耕作土直下が地山（標高は70.3m）になる。造構は地山上面で検出した。

主な遺構には、奈良時代の条坊関連の遺構と奈良～平安時代の井戸・土坑・掘立柱建物と近世の流路がある。

奈良時代 S D01は幅1.0～1.5m、深さ0.2～0.5mの東

西方向の素掘溝で、長さ26m分を確認した。築地の南側雨落溝と考えられる。奈良時代末に埋まる。溝心座標はX = -145,352.400、Y = -19,705.000である。S X29は東西幅3～5m、深さ0.2mの土坑で、長さ23m分を検出した。発掘区外南に続く。奈良時代末の土器が出土した。重複関係からS D02、S E23・26、S B07・08・11・14・16よりも古い。S K30は南北1.4m以上、東西1.1m、深さ0.2mの土坑である。奈良時代末の土器が出土した。重複関係からS E28よりも古い。S E27は掘形が南北1.8m、東西1.95mの平面隅丸方形、深さ2.4mの井戸である。枠は方形縦板組隅柱横棟留、内法は一辻0.75mである。掘形から奈良時代末の土器が出土した。S E22は掘形が南北・東西1.4mの井戸で、枠抜き取り痕跡が直径0.95m、深さ1.1mである。枠抜き取り痕跡から8世紀代の土器が少量出土した。重複関係からS B08よりも古い。S E21は枠抜き取り痕跡が南北・東西2.4m、深さ1.75mの井戸である。重複関係からS B07よりも古い。S E23は枠抜き取り痕跡が南北・東西とも2.5m、深さ2.0mの井戸である。重複関係からS B16よりも新しい。S E21・23から奈良時代末の土器が出土した。S B16は桁行3間(8.1m)、梁間2間(3.6m)の南北棟建物で、柱間は桁行が2.7m、梁間が1.8m等間である。重複関係からS X29よりも新しく、S E23よりも古い。S B05は南北2間(4.8m)、東西2間(4.6m)の建物で、柱間は南北2.4m、東西2.3m等間である。S B04は重複関係からS B05よりも新しい桁行3間(5.1m)、梁間2間(3.2m)の東西棟建物で、柱間は桁行が西から1.5～1.8～1.8m、梁間が1.6m等間である。S B08は桁行3間(5.6m)、梁間2間(3.0m)の南北棟建物で、柱間は桁行が1.6～2.0m、梁間が1.5m等間である。重複関係からS X29、S E22よりも新しい。S B09は南北2間(3.6m)、東西2間(3.0m)の総柱建物で、柱間は南北が1.8m、東西が1.5m等間である。S B10は桁行3間(4.5m)、梁間2間(3.0m)の南北棟建物で、柱間は1.5m等間である。柱穴から奈良時代後半の土器が出土した。S B11はS B10と柱筋を揃える桁行3間(6.3m)、梁間2間

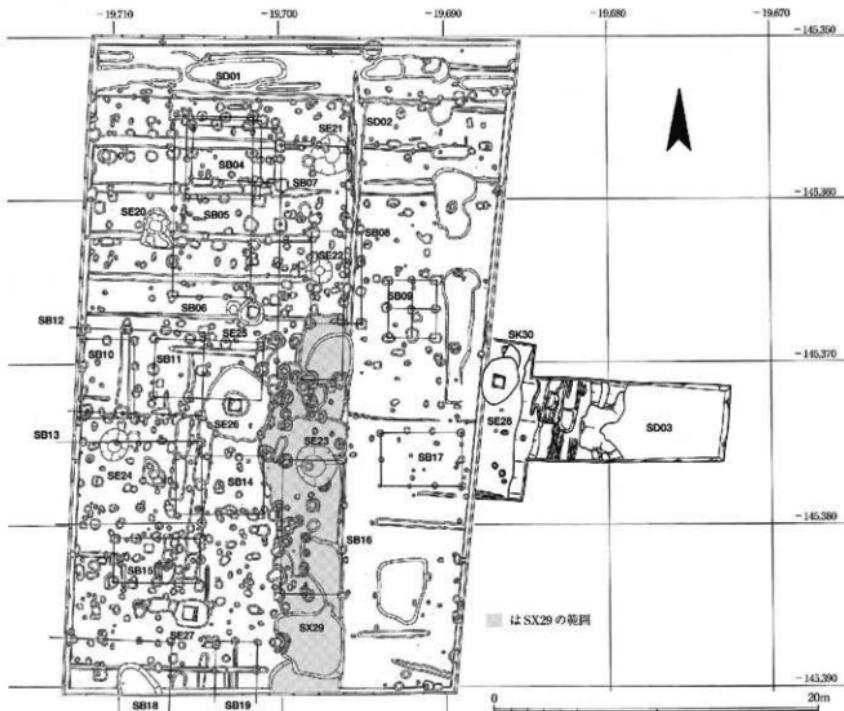


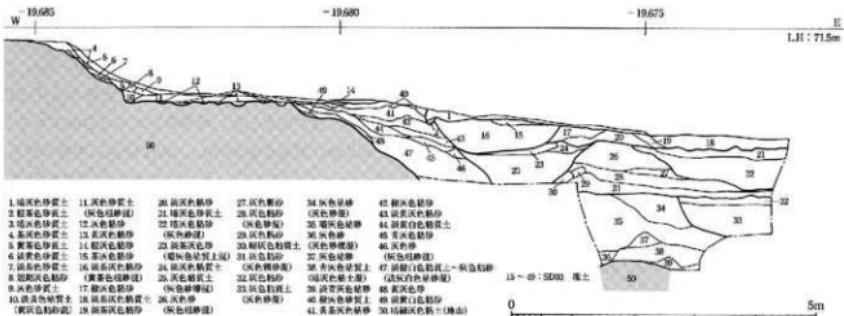
第14-1次調査 発掘区西壁上層図 1/50

(3.6m) の東西棟建物で、柱間は桁行が2.1m、梁間が1.8m等間である。S B14はS B11と柱筋を揃える桁行3間(5.1m)、梁間2間(3.6m)の東西棟建物で、柱間は桁行が東から1.5-1.8-1.8m、梁間が1.8m等間である。S B19はS B14と柱筋を揃える南北棟建物で、桁行1間(1.8m)分、梁間2間(2.4m)を検出した。梁間柱間は1.2m等間である。S B18はS B19と柱筋を揃える東西棟建物で、桁行3間(5.7m)分、梁間1間(2.1m)分を検出した。桁行柱間は東から1.8-2.4-1.5mである。

**平安時代** S D02はS X29と重複して検出した幅0.3~0.5m、深さ0.3mの南北方向の素掘溝で、長さ38m分を検出した。奈良時代末の土器が出土したが、重複関係からS X29よりも新しく、平安時代初頭のものと考える。S E28は掘形が南北3.0m、東西2.5mの平面楕円形な井戸で、深さ2.3mである。枠は横板井櫛組、内法は一辺0.7mである。掘形から奈良時代後半の土器が出土した

が、重複関係からS K30よりも新しく、平安時代初頭のものと考える。S E20は掘形が南北2.5m、東西1.9mの平面不整形な井戸で、枠抜き取り痕跡が南北1.3m、東西1.4m、深さ1.6mである。枠抜き取り痕跡から平安時代初頭の上器が出土した。重複関係からS B06よりも古い。S E26は掘形が南北4.8m、東西4.0mの平面不整形、深さ2.4mの井戸である。枠は方形縦板組隅柱横桟留、内法は一辺0.65m、底に内法直径0.75m、高さ0.5mの曲物を据える。掘形・枠内から平安時代初頭の土器が出土した。重複関係からS B12よりも古い。S E25は掘形が南北1.45m、東西1.55mの平面不整形、深さ1.7mの井戸である。枠は方形縦板組隅柱横桟留、内法は一辺0.6mである。枠内から奈良時代末の土器が出土したが、重複関係からS B06よりも新しく、平安時代初頭のものと考える。S E24は枠抜き取り痕跡が南北1.9m、東西1.75m、深さ1.5mの井戸である。9世紀中頃の土器が出土した。





第14-2次調査 発掘区北壁土壠図 1/80



第14-1次調査 発掘区全景 (北東から)

S B06は桁行5間(10.8m)、梁間3間(4.5m)の南北棟建物で、柱間は桁行が北から2.4-2.1-2.1-2.1m、梁間が1.5m等間である。重複関係からS E 25よりも古い。S B07は桁行6間(14.4m)、梁間2間(4.0m)の南北棟建物で、柱間は桁行が2.4m、梁間が2.0m等間である。重複関係からS E 26よりも新しい。S B12は桁行3間(6.9m)以上、梁間2間(5.1m)の東西棟建物で、柱間は桁行が2.3m等間、梁間が北から2.4-2.7mである。重複関係からS E 26よりも新しい。S B13・15はS B12と柱筋を揃える東西棟建物である。S B13は桁行3間(6.9m)以上、梁間2間(4.8m)、柱間は桁行が東から2.4-2.4-2.1m、梁間が2.4m等間である。S B15は桁行4間(5.2m)、梁間2間(2.8m)、柱間は桁行が1.0~1.5m、梁間が1.4m等間である。

S B17は桁行3間(4.8m)、梁間2間(3.2m)の東西棟建物で、柱間は1.6m等間である。柱穴は無遺物で、他の遺構との重複も無く、時期を特定できなかった。

近世 S D03は近世の南北方向の流路で、南北5m、東西9m分を検出した。部分的に掘り下げ、底(標高67.7m)を確認した。奈良・平安時代の土師器・須恵器、瓦器、瓦質土器、近世陶磁器が出土した。(宮崎正裕)



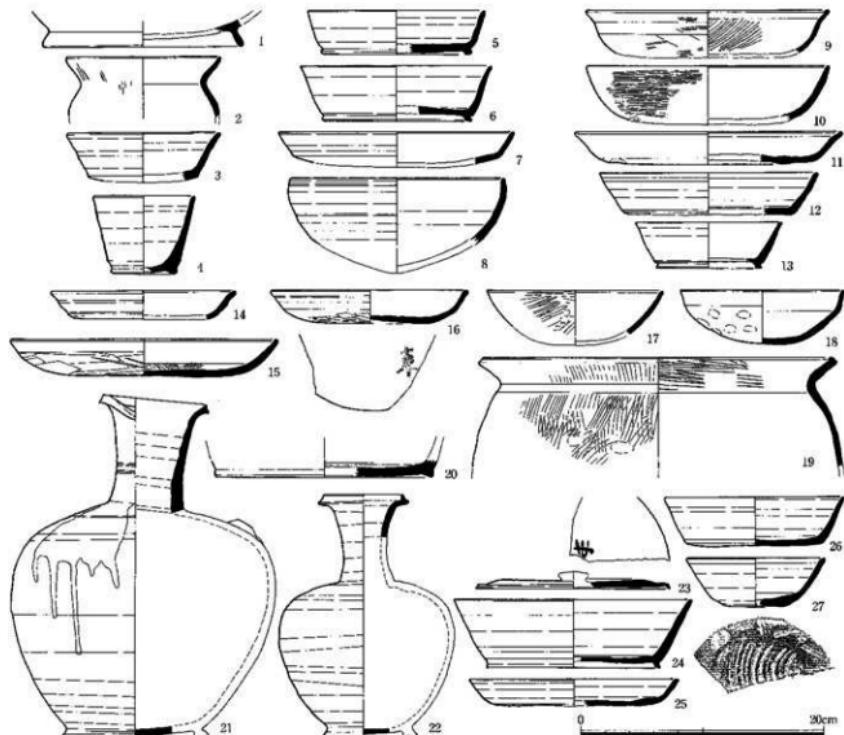
第14-2次調査 発掘区全景 (南から)

**出土遺物** 瓦塚と奈良時代～近世の土器・土製品が遺物整理箱で126箱分出土した。その他、木簡が3点(すべてがS E 27枠内埋土出土、判読不能)、漆椀が1点、櫛が1点、刀子が1点、釘が15点、楔が1点、砥石が3点、サスカイト製剝片が2点、埴堀が1点、縁羽口が2点、鉄鋸が3点と曲物片や壁土片などがある。

**瓦塚** 大半が奈良時代のもので、軒丸瓦は6284型式種別不明が1点、型式不明が3点、軒平瓦は6642型式A種が1点、6663型式B種が4点、6700型式A種が1点、型式不明が2点である。丸瓦は502点(40.37kg)、平瓦が1,062点(84.02kg)、丸瓦か平瓦か不明が476点(5.99kg)である。塚は15点出土した。

**土器・土製品** 土師器、須恵器、奈良三彩、瓦器、瓦質土器、陶磁器、甕、瓶、硯、ミニチュア甕、製塙土器、土馬、墨書き土器(土師器1点、須恵器8点)がある。

そのうち、遺物量が豊富なS E 26・27の出土土器について述べる。S E 26は掘形・枠内から、ともに遺物整理箱で2箱分の遺物が出土した。土師器杯A・B・C、杯蓋、皿A、碗A、高杯、壺A、甕、甕、製塙土器、須恵器杯A・B、杯蓋、皿C、鉢A・D、壺A・E、平瓶、甕がある。1~8は掘形出土土器である。3は丸底気味の須恵器Aで、底面外面をヘラカリ後、ロクロナデ調整する。8世紀末のものと考える。掘形出土の土師器には、



SE26・27出土土器 1/4

杯Aの他に杯C、椀Aの小破片が多い。その大部分は表面の状態が悪いが、一部にケズリ調整が観察できる。9～13は枠内の出土上器である。9・10の土師器杯Aは、口縁部外面をケズリ後、ミガキ調整する。9は口縁部内面に斜放射状暗紋を施す。底部から口縁部への立ち上がりはやや開き気味である。また、ケズリ調整が残る上師器杯・皿も多く、8世紀末～9世紀初頭のものと考える。SE27は掘場から遺物整理箱で1箱分、枠内から4箱分の遺物が出土した。上師器杯A・B・C、杯蓋、皿A・C、椀A・C、高杯、甕、甌、鉢、製塩土器、須恵器杯A・B、杯蓋、皿B・C、鉢、甕E・L、平瓶、甕がある。14～27は枠内出土土器である。15の上師器皿Aの底部内面にはハケメが残る。16の上師器杯Cは底部外面に「東」の墨書きがある。23の須恵器蓋頂部外面には「卅」の墨書きがある。27の須恵器椀は底部外面に糸切りの痕跡がある。21・27は東海系の可能性がある。掘場出土器は、8世紀末のものと考える。(宮崎正裕、池田富貴子)

### Ⅲ まとめ

今回検出した井戸9基は、SE22を除く8基すべてが奈良時代末～平安時代初頭のもので、西大寺建立以前の奈良時代前半にまで遡るのは確認できなかった。建物に間しても同様で、奈良時代末にS X29が埋められた後、SB10・11・14・16・18・19が建てられる。SB11廃絶後の平安時代初頭にSE26が造られる。それ以降、SB07→SE21・23→SD02という順序で遺構が構築される。特に発掘区中央部分では、9世紀中頃までの短期間に、相当な作造が行われるようである。

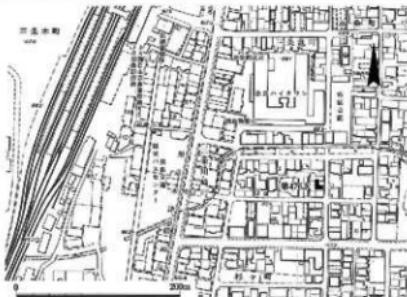
平城京西二坊大路の遺存地割部分で、近世の流路SD03を検出したが、西二坊大路の側溝など往時の痕跡は確認できなかった。当発掘区の南380mで、西二坊大路を検出している(市HJ第283次調査)が、SD03の西端位置は第283次発掘区で検出した西二坊大路西側溝の西端位置に比べて、西に18m程度寄る。一帯はSD03埋没後、水田耕作時までに削平を受けるようである。

(宮崎正裕)

## 4. 平城京左京四条五坊十一坪の調査 第476次

調査次数 II J 第476次  
 工事内容 共同住宅新築  
 届出者名 有限会社真輝商事  
 調査地 奈良市杉ヶ町47-2

調査期間 平成14年5月9日～5月24日  
 調査面積 76.5m<sup>2</sup>  
 調査担当者 三好美穂



第476次調査 発掘区位置図 1/6,000

### I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では左京四条五坊十一坪の東辺中央にあたり、敷地の東端に十一坪・十四坪の坪境小路が想定されている。近隣の調査では、弥生時代から古墳時代の集落や流路、上器や木製品等が多く発見されてはいるものの、これらの時代以外の遺構は殆ど検出されておらず、奈良時代の遺構も稀薄であることが確認されている。今回の調査では、弥生時代から古墳時代の遺構の検出や奈良時代の宅地内の利用状況の確認を目的として、L字形の発掘区を設けて実施した。

発掘区内の基本的な層序は、造成土（約0.4m）、耕土（0.1m）、茶灰色粘土（0.1～0.2m）、茶灰色砂質土（0.1～0.2m）、淡黄灰色粘砂（0.1m・奈良時代遺構面）、黒灰色粘砂（0.1～0.2m・奈良時代遺構面及び弥生時代遺構面）と続き、表土下約1.0mで黄褐色粘質土の地山に至る。奈良時代の遺構面である淡黄灰色粘砂は、発掘区北半部にのみ堆積しているだけで、発掘区全体には広がってはない。奈良時代の遺構の多くは、黒灰色粘砂で検出した。

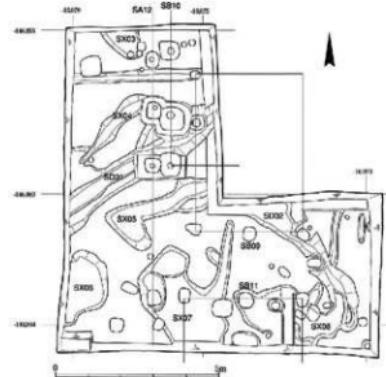
### II 検出遺構

検出した主な遺構には、弥生時代の素掘り溝2条、土坑6、奈良時代の掘立柱建物3棟、柱列1条がある。以下、時代ごとにまとめて記す。

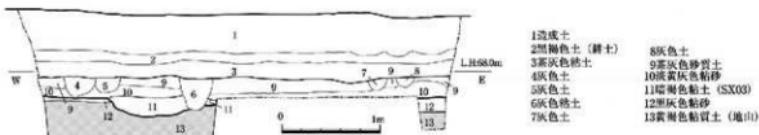
#### 弥生時代

SD01は、発掘区中央で検出した素掘り溝で、国土方眼方位北で東へ振れている。溝幅は約0.8m、長さは5.5m分を確認した。溝の両端は、それぞれ発掘区外へ続く。検出面からの深さは約0.4m。溝内には、弥生土器片を包含する2層の堆積土（下層：暗灰色粘土、上層：暗茶褐色砂質土）がある。

SD02は、発掘区東端で検出した素掘り溝で、国土方眼方位北で西へ振れている。溝幅は0.3～0.5m、長さは4.0m分を検出した。検出面からの深さは0.3～0.4m。溝



第476次調査 遺構平面図 1/150



第476次調査 発掘区北壁土層図 1/50



第476次調査 発掘区全景（南から）



第476次調査 発掘区全景（北から）

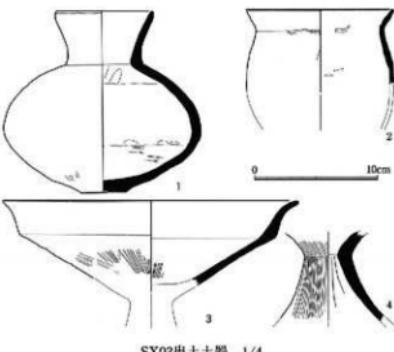
底には灰色粘土（約0.1m）が、上層には黄灰色粘砂（約0.3m）が堆積している。埋土からは、弥生土器片が少量出土した。SD01と接続する可能性もあるが、今回の調査では確認することはできなかった。

土坑（SX03～08）は、発掘区全域で検出したがSX03・06・08以外は、検出面からの深さが0.05～0.1mと浅く、掘形の断面形は皿状を呈している。SX04・05は溝状を呈しており、SX04は灰色粘土が、SX05は黄灰色粘砂が堆積している。SX08は、東西3.0m、南北2.0m以上で、平面の掘形は不整形である。検出面からの深さは、0.2～0.4mある。土坑内には大きく2層（下層：青灰色粘砂、上層：黄灰色粘砂）の堆積が見られる。先述したSX02と接続しており、いずれも上層には黄灰色粘砂が堆積しており、同時に埋没したことが判る。とともに弥生土器片が若干出土した。

#### 奈良時代

掘立柱建物3棟（SB09～SB11）と柱列（SA12）は、いずれも発掘区外へ統くため規模がわかるものはないが、SB09は、東西2間（3.2m）、南北3間（4.8m）の規模の小さい南北棟建物になると考えられる。西側柱列の北から3番目の柱を欠く。SB10は南北2間（3.5m）以上、東西1間以上で、柱掘形の一辺が0.5～0.7mある。重複関係からSB09よりも新しいことがわかる。SB11は、北側柱列2間（3.7m）を検出しただけであるが、南北方向の建物になると考える。柱掘形の規模や柱間寸法はSB09とほぼ同じである。SA12は南北方向の柱列で7.2m分を検出。北から3番目と4番目の柱間が4.0mと広い。柱穴が失われて残存していない可能性も考えられる。重複関係からSB10よりも新しいことがわかる。

建物や柱列の柱穴は、検出面からの深さが0.1～0.2m程度しか残存していないものが大半である。平安時代以降の土地利用の変遷が明確ではないが、後世に奈良時代の遺構面が大規模に削平されているものと判断できる。



SX03出土土器 1/4

#### III 出土遺物

出土遺物は、遺物整理箱で3箱分ある。このうちの大半が弥生土器で、古墳時代から江戸時代の土器が若干ある。この他に、ナイフ形石器1点、砥石1点、土馬1点がある。弥生土器の多くは壺の破片で、表面が摩滅しており詳細な時期が分かれるのが少ない。外面にタキの痕跡が残るものがある。SX03からは弥生時代後期の高杯、器台、壺、壺がまとめて出土した。

#### IVまとめ

冒頭でも記述しておいたが、調査地周辺では奈良時代以降の遺構はほとんど検出されておらず、少なくとも奈良時代の遺構は稀薄であるという見方が強かったが、今回、奈良時代の掘立柱建物や掘立柱列を検出したことから、周辺にも奈良時代の遺構が残存している可能性が高まっているといえる。ただ、今回の調査地の周辺には、JR奈良駅周辺地区画整理事業に係る発掘調査例（市HJ第477-1・-3～6次調査）のように宅地としては利用されず空閑地であった箇所（左京四条五坊六坪）もあることから、今後の発掘調査の成果を踏まえ周辺の宅地利用状況を検討していかたい。

（三好美穂）

5. 平城京左京五条五坊十一坪の調査 第478次

調査次数	H J 第478次	調査期間	平成14年5月30日～8月13日
工事内容	倉庫建設	調査面積	650m <sup>2</sup>
届出者名	中村産業株式会社	調査担当者	山前智敬
調査地	奈良市西木津町字比八塚81-4		



第478次調査 発掘区位置図 1/6,000



I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によると、左京五条五坊十一坪の中央やや北西よりに位置する。

調査地の東約20mの地点で行った調査(県平成3年度)では、奈良時代の掘立柱建物、土坑、中世小溝、時期不明の河川を、また、十坪内で行った市HJ第148次調査(昭和63年度)では、古墳時代の溝、奈良時代の掘立柱建物・塚、井戸、溝、中世の土坑、溝を検出している。

今回の調査は、古墳時代の遺構の確認と、奈良時代について十一坪内の様相を把握することを目的として実施した。

発掘区内の基本的な層序は、アスファルト、クラッシャー、造成盛土、暗灰色土（耕土）、淡灰色土（床土）、茶褐色粘質土または淡黃灰色粘質土（整地土）と続き、現地表下約12mで紫青褐色粘質土の地山に至る。

遺構面は整地土上面または地山上面で、標高はそれぞれ68.3mと68.1mである。発掘区の東端から約9m西に水田の段差があり、東側よりも0.2~0.4m低く、遺構面がかなり傾斜している。

## I 检出遗漏

検出した遺構には、時期不明の河川、古墳時代の土坑、奈良時代の土坑、井戸、溝、掘立柱建物・塀、平安時代の土坑、井戸、掘立柱建物・塀、溝がある。以下時代ごとに概要を述べる。



第478次調査 発掘区全般（北から）

**古墳時代の遺構** S K01がある。S K01は平面楕円形で、東西約0.7m、南北約0.9m、深さは約0.3mである。埋土から、古墳時代の土師器が出土した。

**奈良時代の遺構** S E02・16、S K03~05、S D06・07、S X08、S A09・12、S B10・11がある。

S E02の掘形は平面楕円形で、東西約1.6m、南北約1.2m、深さ約1.2mである。井戸枠の大半は抜き取られているが、底に曲物が残っていた。埋土から8世紀中頃～後半の土師器、須恵器が出土した。S E16の掘形も平面楕円形で東西約2.1m、南北約2.3m、深さは約2.3mである。井戸枠の内法は東西約0.6m、南北約0.7mで、構造は方形縦板組附柱横留である。掘形埋土から古墳時代の土師器、8世紀中頃～後半の土師器、黒色土器が、枠内埋土から8世紀の土師器、須恵器、丸瓦・平瓦、曲物、籌、壺、串舟、刀子、桃種と8世紀末の黒色土器、土師器が出土した。

S K03の平面は隅丸方形で、東西0.7m以上、南北約0.7m、深さ約0.2mである。埋土から8世紀末の土師器、須恵器、8世紀の平瓦が出土した。S K04の平面は隅丸方形で、東西1.7m以上、南北約3.0m、深さ約0.2mである。埋土から8世紀中頃～後半の土師器、須恵器、8世紀末の黒色土器、8世紀の平瓦、製塙上器が出土した。重複関係からS B24・26よりも古い。S K05の平面は円形で、東西3.2m以上、南北約3.9m、深さ約0.2mである。埋土から8世紀中頃～末の土師器、須恵器、奈良時代の丸瓦、製塙上器が出土した。重複関係からS K14、S B10・11よりも古い。S X08の平面は平面隅丸方形で、東西3.3m以上、南北約2.0m、深さ約0.3mである。埋土から8世紀の土師器、須恵器、丸瓦・平瓦、黒色土器、製塙土器が出土した。重複関係からS B20よりも古い。

S D06は幅約1.0m、深さ約0.2m、長さ約5m分を検出。埋土から古墳時代の土師器、8世紀の土師器が出土。重複関係からS A09よりも新しい。S D07は北東に振れる溝で、西端は搅乱で壊されている。幅約0.8m、深さ約0.1m、長さ25m分を検出。埋土から8世紀の土器、平瓦が出土。重複関係からS X13よりも古い。

S A09は南北1間(1.8m)以上の掘立柱堀。重複関係からS D06よりも新しい。S A12は南北5間(8.7m)以上の掘立柱堀である。

S B10は東西1間(1.8m)以上、南北2間(4.2m)以上。S B11は東西1間以上、南北3間(7.2m)である。S B10・11ともに南北棟の掘立柱建物と考えられ、重複関係からS K05よりも新しい。

**平安時代の遺構** 9世紀初頭～前半の遺構には、S X13・17、S D18、S K14・15・19、S B20～22がある。

S X13は平面不整形で、東西3.5m以上、南北3.0m以上、深さは0.2m。埋土から古墳時代の須恵器、8世紀の土師器、須恵器、平瓦、8世紀～9世紀初頭の土師器が出土した。重複関係からS K01、S D07よりも新しい。

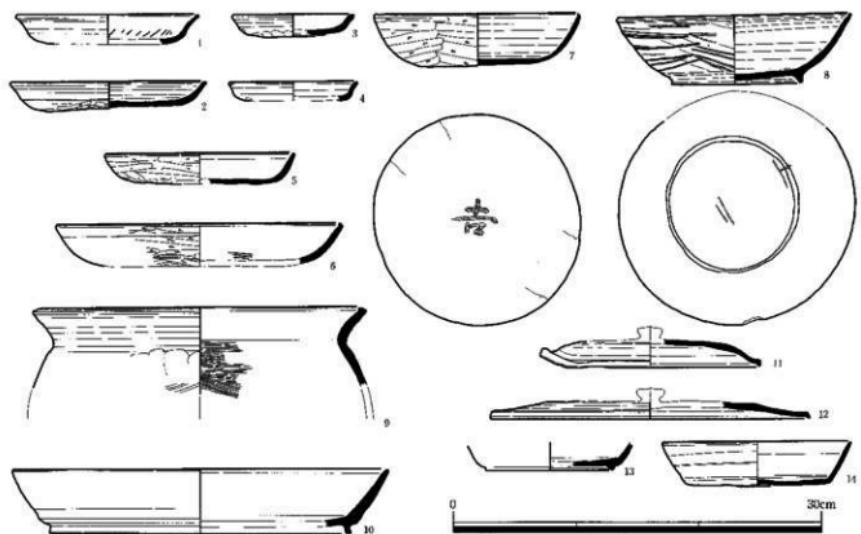
S K14は平面楕円形になると思われる。東西1.9m以上、南北約2.4m、深さ約0.1mである。埋土から8世紀の須恵器、8世紀末～9世紀初頭の土師器が出土した。重複関係からS K05よりも新しい。S K15の平面は隅丸方形で、東西約0.9m、南北1.0m、深さ約0.4mである。埋土から8世紀の土師器、8世紀末～9世紀初頭の土師器が出土。S X17の平面は隅丸方形で、東西約3.7m、南北1.2m以上、深さ約0.2mである。埋土から8世紀の土師器、9世紀前半の土師器が出土した。重複関係からS D18よりも古い。

S K19は平面隅丸方形で、東西約1.1m、南北約0.8m、深さ約0.2mである。埋土から古墳時代の土師器、8世紀の土師器、須恵器、平瓦、9世紀の須恵器および製塙土器が出土した。重複関係からS B21よりも古い。

S B21は東西1間以上、南北2間(4.2m)で、東西棟の掘立柱建物と考えられる。重複関係からS D18・28よりも古く、S K19よりも新しい。S D18は幅約1.2m、深さ約0.2mで、長さ7.4m分を確認した。埋土から8世紀～9世紀中頃の土師器、須恵器、8世紀の丸瓦・平瓦・磚、製塙上器、黒色土器が出土した。重複関係からS X17、S B21よりも新しい。S B20は東西2間(2.7m)、南北2間(2.7m)の総柱建物。重複関係からS X08よりも新しい。S B22は東西4間(7.5m)以上、南北2間(3.6m)で、東西棟の掘立柱建物と考えられる。

9世紀末～10世紀初頭の遺構には、S E23、S B24、S A25がある。S E23の掘形は隅丸方形になると想われる。東西1.2m以上、南北2.2m、深さ約0.5m分を確認した。枠の構造は縦板組である。枠内埋土から8世紀の土師器、須恵器、8世紀の丸瓦・平瓦、10世紀初頭の土師器が、掘形埋土から9世紀中頃の土師器、9世紀中頃～後半の土師器が出土した。S B24は東西1間(1.8m)以上、南北2間(3.6m)で、東西棟の掘立柱建物と考えられる。重複関係からS K04よりも新しい。S A25は東西3間(5.7m)以上の掘立柱堀。

10世紀の遺構にはS B26、S A27、S D28がある。S B26は東西1間以上、南北3間(4.5m)で、東西棟の掘立柱建物と考えられる。重複関係からS K04よりも新しい。S A27は南北1間(2.7m)以上の掘立柱堀。S D28は幅約0.7m、深さ約0.3mで、長さ約8.8m分を検出。埋土から8世紀及び10世紀の土器が出土した。重複関係からS B21よりも新しい。



井戸 S E 16出土十七器 1/4

### Ⅲ 出土遺物

遺物は、瓦類、土器類、木製品、金属製品が遺物整理箱で合計24箱分が出土した。そのうちの15箱分が奈良時代の土器類である。発掘区の西半分は後世の削平により遺構面が失われていたため、出土遺物の大半は発掘区東半分からのものである。土器類は、奈良時代のものが主体を占めており、古墳時代、平安時代のものは量的には少ない。ここでは、奈良時代の井戸 S E 16から出土した土器群の概要について述べておく。

楕形出土土器には、古墳時代（6世紀）の土師器、奈良時代後半の上器皿A（1）、黒色土器A類、須恵器片が少量出土した。1は、口径15.0cmに復元できる。口縁部内外面はヨコナデ、底部外面は器表面が剥離しており調整は不明である。内面には、一段の斜放射状彫文が施されている。中央内出上上器には、土師器皿A・B（8）・C（2）、皿A（5・6）、C（3・4）、壺（9）および須恵器A（14）・B（13）、杯B蓋（11）、皿B（10）、皿B蓋（12）、壺、甕がある。（7）は、口径16.8cm、器高4.3cm。外面は全体をヘラケズリで丁寧に仕上げている。底部外面中央に墨書があり、「吉」と読める。杯Bは、口径19.2cm、器高5.6cm。外面全体をヘラケズリしたのち、口縁部外面のみヘラミガキで仕上げている。底部外面中央には、焼成後に「二」と線刻している。（2）は、口径16.0cm、器高2.2cm。底部外面から口縁部下半にかけてヘラケズリで調整。皿Aには、口径15.5cmのもの（5）

と23.4cmの大形のもの（6）がある。いずれも外面全体をヘラケズリで調整。（9）は、いわゆる「都城型」壺であるが、口縁端部や肩部～体部形態の特徴からみて南山城産の可能性がある。須恵器は、（10）の底部外面と（12）の頂部外面にロクロケズリが見られる。14の底部外面はヘラキリ。これらの上器は、形態的な特徴からみて8世紀後半～末頃にかかる頃のものと考えられる。

### IVまとめ

今回の調査では、古墳時代から平安時代中葉にかけての遺構を検出することができた。

古墳時代の遺構は、土坑を1基検出したのみであったが、奈良時代の遺構埋土内に古墳時代の土器片が混在している状況からみて、奈良時代の遺構によって破壊されたものと考えられる。

奈良時代の十一坪内の宅地利用については、遺構の大半が削平されていたため、詳細については明確ではないが、掘立柱跡や建物配置等から推察して、坪内を幾つかに分割して利用していた可能性は高いと思われる。

平安時代になってからも、少なくとも10世紀までは、調査地内は宅地として利用されていたことが明らかになった。これまでの周辺調査においては、10世紀代の遺構が検出された例はなく、平城京廃都後の左京五条五坊域の様相を把握するための貴重なデータを得ることができた。今後の周辺調査の成果をまって、さらに検討をすすめたい。

（山前智敬、三好美徳）

## 6. 平城京左京五条四坊十一坪の調査 第481次

調査次数 H J 第481次  
 工事内容 共同住宅建設  
 届出者名 個人  
 調査地 奈良市大安寺六丁目 2-11

調査期間 平成14年7月10日～7月24日  
 調査面積 103m<sup>2</sup>  
 調査担当者 武田和哉

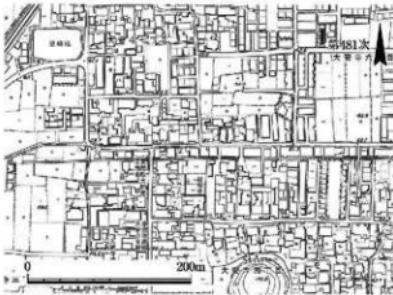
調査地は、平城京の条坊復原では左京五条四坊十一坪の南辺の西隅近くに該当しており、敷地の南側には五条条間南小路が想定される場所にある。同坪内では過去に、調査地北方約100m付近で実施した試掘調査が1件あって、奈良時代の遺構面を確認している。また本調査に先立つ試掘でも、遺構の存在が確認されたため、遺構の詳細な様相や条坊間連遺構の検出等を目的として、東西約5m、南北約21.5mの規模で発掘区を設定した。

発掘区内の基本層序は、上から造成土（約0.6m）、次いで黒灰色粘質土（約0.1m）があり、現地表下約0.7mで黄灰色粘土または粗砂の地山に至る。遺構面は地山上面で、地山上面の標高は概ね63.9mである。

検出遺構は、古墳時代以前の溝、奈良時代の建物、溝、土坑である。以下に、検出した遺構の概要を記す。

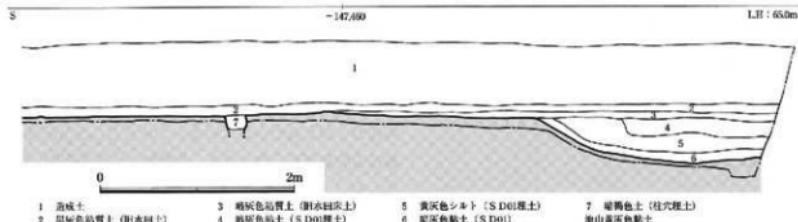
古墳時代以前の遺構 S D01は発掘区の北側で検出した溝である。幅2.4～2.8m、深さは約0.3mを測る。発掘区の北端で屈曲しているように見受けられるが、詳細は明らかではない。発掘区内では、概ね北西から南東にかけて斜行する部分を検出した。溝の主軸の方向は、北に向かって約35度西に振られている。埋土からは、古墳時代の土器小片が若干出土したのみであり、詳細な遺構の時期を考える手掛かりとはならない。なお、遺構の重複関係からみて、後述の奈良時代の建物S B02や土坑S K04よりも古いことがわかる。

奈良時代遺構 S B02は発掘区の中央や北側で検出した建物である。東西1間（2.4m）分、南北2間（4.8

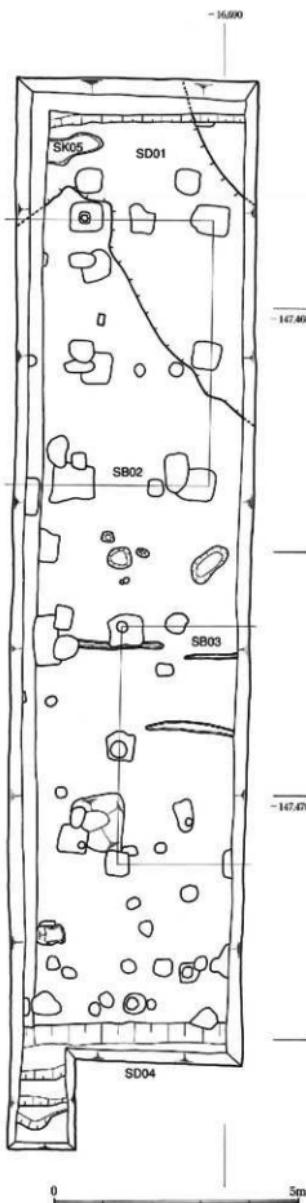


第481次調査 発掘区位置図 1/6000

m）分を検出した。東西棟の建物と推測され、建物の西側部分は発掘区外へと延びる。S B03は、発掘区の中央やや南側で検出した建物である。東西1間分（2.4m）、南北2間（4.8m）分を検出した。S B02と同様に東西棟の建物と推測され、建物の東側は発掘区外へと延びている。このほか、奈良時代の柱穴については、2ないし3個が直線上に並ぶものが若干あり、壠となる可能性がある一方で、建物の一部である可能性もある。ただし、発掘区の制約等もあって明確に判断できない。S D04は発掘区の南端で検出した東西方向の溝である。幅約2m、深さ約0.35mを測る。埋土から奈良時代の土器・瓦が出土した。遺構の規模や時期、位置的関係からみて、調査地の南辺に想定される五条条間南小路の北側溝もしくは築地の雨落溝である可能性が高い。S D04心の国土座標



第481次調査 発掘区西壁土層図 1/50



上の位置は ( $X = -147,475.40$   $Y = -16,693.80$ ) である。SK05は発掘区の北西隅で検出した土坑である。掘形は平面不整形を呈し、発掘区内では東西約1.2m、南北約0.6m分を確認した。深さは0.15m。西側は発掘区外へと延びる。遺物は、奈良時代の土器が出土した。

出土遺物は、遺物整理箱8箱分あり、その大半を奈良時代の土器と瓦が占めている。このうち、SK05出土土器は遺物整理箱5箱分ある。器種は、土師器は壺、高杯、皿、杯C、須恵器は杯A・杯B、碗、壺A蓋等がある。このうち、土師器壺はいずれも口径30cm程度の比較的大型の個体である。これらの土器はその特徴から見て、奈良時代後半頃のものと考えられる。

(武田和哉)

## 7. 平城京左京四条六坊十五坪・奈良町遺跡の調査 第482次

調査次数	HJ 第482次	調査期間	平成14年8月9日～9月27日
事業名	椿井小学校校舎建設事業	調査面積	204m <sup>2</sup>
届出者名	奈良市長	調査担当者	中島和彦
調査地	奈良市椿井町25番地		

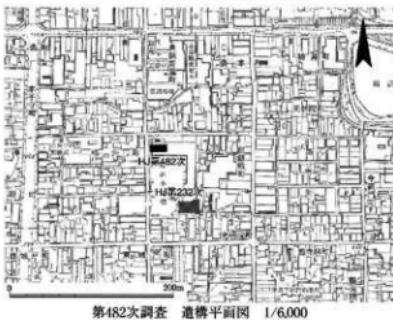
調査地は、平城京の左京四条六坊十五坪の北西角にあたり、また奈良町遺跡内にある。椿井町は、「椿井郷」として室町時代から現れ、天正13年（1585年）には、調査地の道路をはさんだ西側に代官所が設置される。現在その地には、江戸時代より墨の製造販売を行う「古梅園」がある。調査地の南約70mでは、市田第232次調査が行われ、平安～江戸時代の遺構が見つかっている。

調査地は、明治9年（1876年）に椿井小学校が建設されるが、それ以前は造酒屋の菊屋長左衛門の屋敷だったとされる。菊屋長左衛門は17世紀後半には椿井町の住人として文献に現れ、19世紀中頃には奈良町で2番目の酒の製造量を記録する。発掘調査では、古代中世の遺構と共に、江戸時代の酒造関係の遺構が想定された。

発掘区は、東西に長い旧校舎の西半部分に設定し、さらに校舎北側で解体工事中に発見された井戸を調査するため、その部分に小規模な発掘区を設けた。

発掘区内の層序は、発掘区西側で旧校舎解体時の造成土、暗赤褐色土（焼土層）、灰褐色土（室町時代整地層）で、地山の灰色砂礫となる。地山面の標高は76.1mである。発掘区東半部には焼土層がなく、造成土の下に灰褐色土他の整地層等があり地山となる。遺構検出は地山上面で行ったが、後述する埋甕遺構部分では灰褐色土上面でを行い、地山上面での遺構検出は出来なかった。

検出した遺構には、平安～江戸時代前半のものがあり、井戸9基、土坑、柱穴の他、埋甕遺構、方形石組土坑、



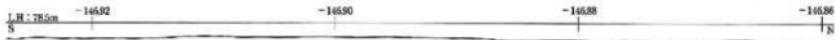
第482次調査 遺構平面図 1/6,000

暗渠遺構がある。主要遺構は一覧表にまとめた。

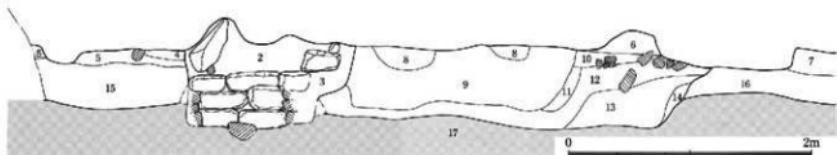
平安時代の遺構には、SE01～04・06、SK05等がある。平安時代前半と後半に分かれ、後者が遺物量とともに多く、特に11世紀末以降の遺構・遺物が目立つ。

鎌倉時代の遺構には、SE07、SK08・09等があり、13世紀後半から末のものが目立つ。SK09からはその時期の土師器皿が完形で多く出土した。

室町時代の遺構にはSE11、SK10・12・13、SX14等がある。15世紀前半の井戸SE11の廃絶後、整地（0.2～0.4m）をして、埋甕遺構SX14が築かれる。SX14は大甕を南北3列、東西14列（42個）以上設置し、さらに発掘区外西側に続く。規模は東西約11.2m以上、南北約2.3mある。埋甕は抜き取り坑と破壊され消滅したものも含め、

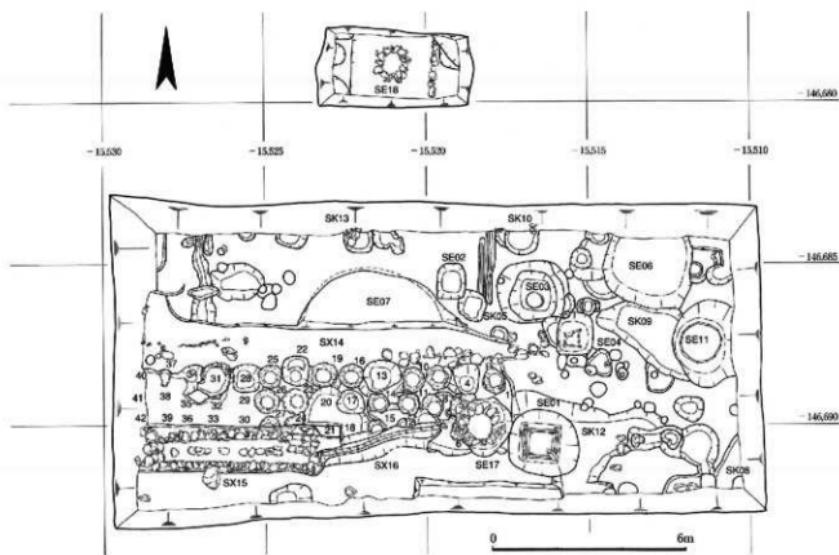


1

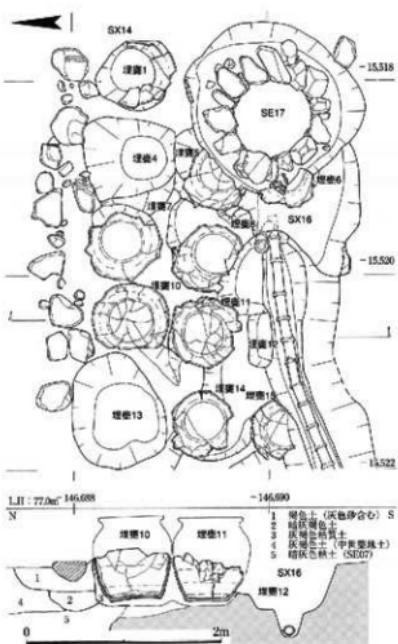


- |                  |                       |                  |                |
|------------------|-----------------------|------------------|----------------|
| 1 油成土            | 6 灰褐色粘質土              | 11 深灰色粘質土        | 16 深褐色土（中世整地層） |
| 2 黄褐色粘質土（SX10壁上） | 7 深褐色土と青灰色土上の瓦層（上段か？） | 12 深灰褐色粘質土       | 17 深色砂礫        |
| 3 灰褐色粘質土（SK10壁上） | 8 灰褐色土（生垣土）           | 13 灰褐色土          |                |
| 4 灰褐色土           | 9 灰褐色粘質土（焼土層・埋甕抜取り跡）  | 14 灰褐色土          |                |
| 5 黑色泥炭（地土合む）     | 10 灰褐色土               | 15 灰褐色粘質土（中世整地層） |                |

第482次調査 発掘区西壁土層図 1/40



第482次調査 造橋平面図 1/150



SX14平面及び断面図 1/50



第482次調査 発掘区全景（東から）



埋臺造構SX14（南西から）

東北隅から南側と西側へ順に1から番号を付した。下半部が残存する大甕が18個あり、詳細は表に記す。大甕は群全体で1つの掘形に納まり、個々の掘形はない。大甕と抜き取り坑はいずれも焼土層で埋まる。特に大甕の中からは焼けた壁上、炭とともに火を受けた土器が多量に出土した。埋甕のすぐ北側には人頭大の石が東西に列び、埋甕に伴う建物の礎石と考えられるが、全容は不明である。石列には掘え付け用の掘形がある。焼土層はこの石列をも被い、その外側で途切れる。下半部が残存する甕はすべて備前窯の製品で、口縁部の形態から15~16世紀前半のものと考えられる。焼土層からは16世紀中頃の土器が出土し、この頃廃絶したと考えられる。またSX14と焼土層から出土する瓦は少量で、瓦葺き建物の可能性は低いと考えられる。なお甕37の北側の遺構上面からは、鋸銭が出土した。鋸銭は103枚で1束で、政和通寶

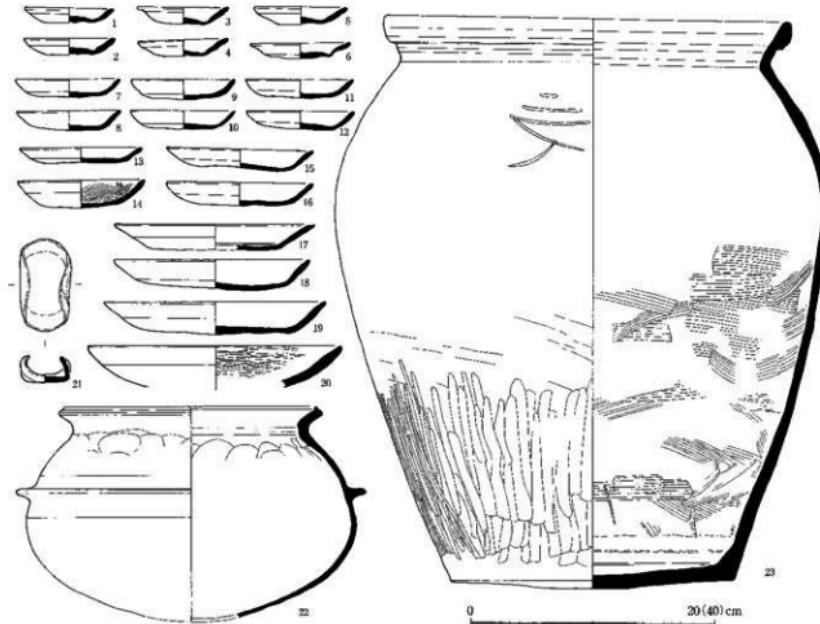
が1点確認できた。

江戸時代前半の造構にはSX15・16、SE17の一連の造構がある。SX15は平面長方形の石組み土坑で、西と北東隅に階段がある。後述するSX16を介してSE17に排水する。幅は狭く室より通路的な様相を示し、性格は不明。SX16は暗渠造構で、幅約0.9m、深さ約0.75mの溝底に、瓦質の土管を17本連結させる。土管はSX15とSE17間の約4.2mをつなぐ。SE17と接続する東端は、SX14の埋甕6を残し、その下に長さ約2.5mの横穴を掘り、土管の代わりに備前窯の甕の破片を充填する。また一番東端の土管の上には上方に向て土管が4本接続される。ここにもなんらかの施設があり、下に排水していたと考えられる。いずれも17世紀前半から中頃のものである。井戸SE18は今も水をたたえ、近代まで使われていたと考えられるが、築造時期は不明である。方形と考えられる掘形の東

遺憾一覽表

SX14畢竟一覽表

発 No.	ヘラ記号	備考	発 No.	ヘラ記号	備考	発 No.	ヘラ記号	備考
1	「ヨ」「二入」	抜き取りにより底等半強	11		口輪部まで復元。SX62 により下壊	24		口輪部まで復元。右副錠により半強
5	SE04 により底部半強		14	「一」「二入」	口輪部底部	25		口輪部まで復元
6	SE04 により底部半強		15		SX67 により底等半強	26		口輪部まで復元
7	「ヨ」「三入」	口輪部薄弱	16	「コ」「二入」	口輪部まで復元	27	「吉」「口入」	右副錠により底部半強
8	「吉」「二入」	口輪部まで復元。SX62 により下壊	19	「十」「三入」	口輪部まで復元	31		口輪部まで復元。右副錠により半強
10	「ヨ」「二入」	口輪部まで復元	23		口輪部まで復元	37		抜き取りにより底等半強



SX14出土土器 1/4 23は1/8

側には石列があり、その上面には拳大的の縛が敷かれる。

出土遺物には平安～江戸時代の各時代のものがあり、遺物整理箱144箱の土器類、45箱の瓦類、2箱の木製品、2箱の石製品、1箱の金属製品の他鉄滓、壁上等がある。以下16世紀中頃の一括資料のSX14出土遺物を報告する。

SX14からは遺物整理箱87箱の土器と7箱の瓦類の他、石製品、金属製品、錢貨15点、錫羽口、鐵滓が出土した。

上器類の内65箱は埋甕の破片で、常滑窯の1箱の他はすべて備前窯である。埋甕を除くと、土器は破片で5066点あり、土師器4105点（81.0%）、瓦質土器680点（13.4%）、国産陶器100点（2.0%）、輸入陶磁器181点（3.6%）である。土師器は皿と羽蓋が大半である。土師器皿は大きくa類（1～6）とb類（7～16、18・19）の2種類に分けられる。a類は、口縁部を強くヨコナデ調整し、内面が凹線状に窪む。胎土は砂を含みやや粗い。口径は7.5cm前後のものがほとんどである。b類は、やや平坦な底部から緩やかに屈曲する口縁部で、胎土はきめ細かく精良である。口径は6.0～19.0cm台まで数種あるが、8.7cm前後のものが半数近く占める。17は京都産の土師器皿で、内面には凹線状の園線がある。21は耳皿で、口径7.5cmの皿の両側を内側に折り込む。胎土調整等はb類

と同じである。20は大型で厚手の皿で、内面を丁寧にヘラミガキ調整する。土器器羽釜は大半が大和I型である。22のように口径20cm前後のもの他の12cm前後のものが少量ある。23は埋甕16の備前窯の甕で、肩部と口縁部には自然釉が厚くかかる。肩部には「三人」のヘラ記号があり、反対側にも斜格子文様のヘラ記号の一部が残る。底部には焼成時のひび割れがあり、それを漆を染み込ませた布で充填する。国産陶器は信楽窯が約半数を占め、瀬戸美濃窯が約2割、備前窯が約3割である。輸入陶磁器には口縁端部を外反させる白磁の皿が多く、他に褐色の四耳壺が1個体と少量の青花・青磁がある。

瓦類には、軒丸瓦が左巻き巴紋1点、不明2点、軒平瓦が追珠紋1点、不明1点、丸瓦が137点（25890g）、半瓦が262点（40400g）、磚が2点、礎斗瓦他が5点ある。

今回の調査では、江戸時代の造酒屋「菊屋」に関する遺構は確認出来なかったが、平安～江戸時代前半までの各時代の遺構を検出し、椿井町の歴史が垣間見られた。特に埋甕遺構SX14は、中世の埋甕を多数設置した甕倉としては、奈良町遺跡内では3例目となる。建物の時期、性格等検討課題が多いが、奈良町遺跡の商業を考える上で貴重な資料となる。

（中島和彦）

## 8. 平城京右京四条四坊一坪の調査 第483次

調査次数	HJ第483次	調査期間	平成14年9月24日～10月8日
工事内容	共同住宅建設	調査面積	136m <sup>2</sup>
届出者名	個人	調査担当者	武田和哉
調査地	奈良市宝来四丁目15-18		

調査地は、平城京の条坊復原では右京四条四坊一坪の北西隅付近に該当しており、敷地の北側には三条大路が、また西側には西四坊間西小路が想定されている。

当坪内では過去に調査事例がなく、今回が初めての本調査となるため、遺構の様相の把握を大きな目的として、東西約8m、南北約17mの規模で発掘区を設定した。

発掘区内の基本層序は、上から順に、造成土(0.6~0.7m)、黒褐色粘質土(0.1~0.2m)、暗灰色土(0.1~0.2m)と続き、現地表下0.9~1.0mで黄灰色シルトまたは黄灰色粗砂の地山に至る。遺構面は地山上面で、発掘区内における地山上面の標高は概ね79.7~79.8mである。

検出した遺構には、時期不明の土坑、井戸がある。土坑は発掘区全面に拡がっている。掘形の形状は平面不整形を呈し、深さは概ね0.2~0.3mを測る。土坑内から遺物がほとんど出土せず、時期は明らかではない。井戸SE01は発掘区東辺中央部よりやや南側で検出した。掘形の約半分は発掘区外東へと延びる。発掘区内で検出できたのは南北径約2.1m、東西約0.6m分である。埋土から近世～近代以降の陶磁器片等が出土した。

当調査では奈良時代の遺構は確認できなかった。遺構面が後世に削平されている可能性も考えられる。

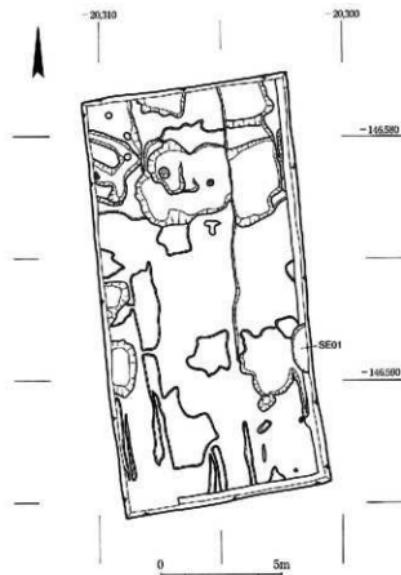
今回の調査の出土遺物の総量は少なく、遺物整理箱1箱分の出土にとどまり、その大半は奈良時代の須恵器・土師器の破片や丸瓦・平瓦の破片である。(武田和哉)



第483次調査 発掘区全景（北から）



第483次調査 発掘区位置図 1/6,000



第483次調査 遺構平面図 1/200

# 9. 平城京左京八条二坊五坪の調査 第484次

調査次数 H J 第484次  
 工事内容 共同住宅建設  
 届出者名 個人  
 調査地 奈良市杏町62、63

調査期間 平成14年10月21日～11月25日  
 調査面積 318m<sup>2</sup>  
 調査担当者 武田和哉



第484次調査 発掘区位置図 1 / 6,000

## I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京八条二坊五坪の南東隅付近に該当し、敷地東辺部に東二坊間路が、また南辺部には八条大路北側溝が想定される。調査地周辺では過去に試掘調査例が2件あり、奈良～平安時代前半の柱穴や土坑、鎌倉時代の土坑、溝等を検出している。

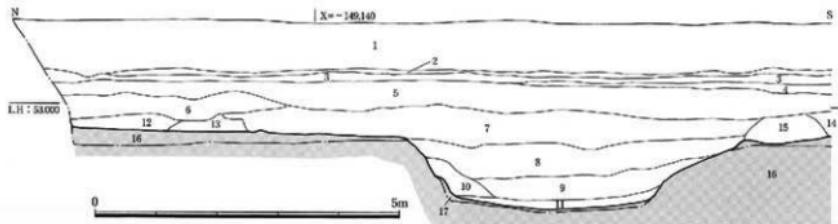
当調査では、既存構造物により構造が破壊されている敷地中央西側部分を避け、南北2ヶ所の発掘区を設定した。

## II 発掘区の基本層序

北発掘区（西壁・東壁）では、上から順に、①造成土（約0.5m）、②黒灰色粘質土（約0.2m）、③暗灰色土（約

0.1m）、④暗灰色土（0.1～0.3m）、⑤暗灰色土（やや粘質、約0.1～0.5m）の堆積がある。北側ではこの下層に⑥暗茶褐色粘質土の堆積があり、⑫暗茶褐色砂質土や⑬暗茶褐色土の下で、⑯灰褐色粘土の地山に至る。埋土に16世紀の遺物が入るS D11は⑫や⑬の上面から掘り込まれ、柱穴は地山上面から掘り込まれる。一方、南側では⑤の下層に⑮暗灰色土（0.2～0.4m）の堆積があり、⑯灰褐色粘土または⑭黒褐色粘土の地山層に至る。後掲のS E09やS D10は埋土に13世紀の遺物が含まれるが、それらは⑮暗灰色土の上面から掘り込まれ、また奈良～平安時代前半の柱穴は地山から各々掘り込まれる。また、中央付近では⑤の下層に⑩暗茶灰色土（約0.1～0.2m）、⑪暗灰色砂（約0.1m）、⑫暗黃褐色粘質土（約0.1～0.2m）、⑬暗褐色砂質土（0.1～0.2m）と続き、⑭黄灰色粘土の地山に至る。素掘り溝は④の上面から、柱穴、9世紀前半の遺物が含まれる井戸S E01は⑭の上面から、各々掘り込まれている。

北発掘区内の遺構面は、鎌倉～室町時代遺構面は北・中央・南のいずれの部分でも④または⑤の下面であり、また奈良～平安時代前半の遺構面は発掘区中央では⑭の上面、発掘区の北と南では地山上面である。地山面の標高は、発掘区中央は53.1m、発掘区北・南側は52.7m。



第484次調査 北発掘区東壁土層図 1/80

- ① 造成土
- ② 黒灰色粘質土（田水田土）
- ③ 暗灰色土（旧水田床土）
- ④ 暗灰色土（旧水田床土 = やや渋く砂質）
- ⑤ 暗灰色土（やや粘質）
- ⑥ 暗茶褐色粘質土
- ⑦ 暗茶褐色土（S D11埋土）
- ⑧ 暗灰色粘質土（S D11埋土）
- ⑨ 暗灰色砂質土（S D11埋土）

- ⑩ 暗褐色粘土（S D11埋土 = くらい色調）
- ⑪ 暗褐色粘土（S D11埋土 = やや渋い色調）
- ⑫ 暗茶褐色砂質土
- ⑬ 暗茶褐色土
- ⑭ 暗灰色土（素掘りの溝埋土）
- ⑮ 暗茶褐色土（柱穴埋土）
- ⑯ 灰褐色粘土
- ⑰ 暗褐色粘土